
風とともに・・・行こう！！

かんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風とともに・・・行こう！！

【Nコード】

N8691T

【作者名】

かんだ

【あらすじ】

風俗店でのまいんちのできごと

風俗嬢とキャバ嬢の違いとは！？その1

これは、僕が、2006年～2010年まで働いてた風俗店での、おもしろおかしくて、そしてちょっぴりせつなく哀しい記録史であります。

これを書くにあたって、僕は数名のヒトたちにアドバイスを求めました。「やっぱり、広く浅く、そしておもしろくするために、ホントと嘘を半々くらいに混ぜたほうがいいんですかね」と。

それに対し、二年以上もの間、僕の良き相棒で僕よりも有能でしかも右腕となってくれていたかとうーんは、ちよいとニヤリとしながら、「半々とかじゃなくて、かなりリアルに書いたほうがいいですよ！なんだかここ最近、上っ面だけの、風俗店、風俗嬢物語みたいなのが出てるらしいですけど、

わかったようなこと言って、実際はわかつちやあいななんですから！なので、ここは一つ、リアルに書いたほうがいいです！」

と、H市駅前の居酒屋さんでそうオススメしてくれた。

五年間のうちの後半一年ほどを共にし、僕が店を辞めてからもちよいちよいお茶したり麻雀のお付き合いをしてくれてるティーチャーももこも、「それはやっぱり限りなく実話を書くべきでしょう」と、ニヒルにニヤニヤ笑ってくれた。

なので、これから書くモノは八割以上ホントのことだと思ってくれてもかまわないっす。

パソコン

の前に座って、さつき女の子の面接してそのあとに撮ってきたプリクラにボカシをかける作業をしていた。

風俗業界に入って三年半弱、店長になって一年半以上が過ぎていた。その頃にはさすがにもう、機械オンチの僕でも業務に必要な作業くらいはできるようになっていた。

ボカシの濃さを調節すると、そばにいたここんちの女の子ゆいが声をかけてきた。この部屋は、スタッフの作業場であり女の子たちの待機場所でもあるのだ。

「そのヒト、ワタシのセンパイかも」

ちなみにここは、T市にあるホテルヘルスの店・またはイメクラともいわれる「J」という風俗店である。そして、高校時代の同級生、前バイトしてた所の同僚とか、知り合いや友達に偶然バッタリ出会うってパターンはけっして珍しくない。

過去の例では、高校時代の同級生だったときにはそれぞれあまり抵抗はない場合が多い。逆に喜ぶシーンが目立つほどだ。一方、前いたキャバでいつしよだったなんてときは、えーっと眉をひそめるなんてケースがままある。

まあそれはともかくとして・

「へっ!？」 画面に目を向けたまま返事をする僕にゆいは、

「大学のいつこ上のセンパイ」

とりあえず僕は、すでに充分認識してたものの、このヒトの観察眼のスルドさに改めて感心した。「プリクラで、しかもすでにボカシもかけてんのに、よく気付くねえ」

一瞬、まあねと得意気な表情を見せつつ、

「そんなことより、マズイじゃんそれ!」

やはりこの業界では、キホン周りのニンゲンにお仕事のことは内緒にしてるんである。ほとんどの子は、家族彼氏はもちろんのこと友達にだってだいたいのヒトに秘密にしてる。しかもゆいにあたっては、数ヶ月前に、そのことに関連した大事件が起こってるのである。

「でもなあ、あの子はきつと大丈夫だと思うんだけどなあ」僕は少し弱気な態度でそう言った。

それは別に、ゆいのセンパイが危険人物だ！と疑っているからとかではなくて、こないだの大事件は僕の致命的なミスによって起こってしまったともいえるからだ。

この件はあまり触れたくないんだけど、いずれ書くことになると思う。

また、僕と同じくゆいもセンパイの人間性が怪しい！と言ってるのではなく、事件の後遺症で不安になっていたのだ。

「あえてこつちから話題をふるのもどうかと思うけど、ここは前もって口止めしといたほうがいいんでないかい」

僕の言葉に、ゆいは少し考えた後、

「うん、任せるよ」

と言った。

そして翌日、僕はゆいのセンパイふうかが出勤してきたときに、誰もいない待合室に呼び出した。お客さんが立て続けに来ない限りその部屋は人気がないので、ミーティング室や撮影場所も兼ねていたのだ。

ふうかをソファアに座らせ、目の前のガラステーブルの上に、十枚ほどの女の子のプロフィール付きプリクラを並べた。

「昨日あなたの面接のときに見本として出した写真、ほとんどのときとメンツはいっしょなんだけど、この中で知ってる顔はないかい？」

来るなりいきなり呼び出されて、ナニゴトかとやや不審な表情のセンパイふうかは、おんなじ顔つきのまま並べられた女の子たち

の写真をジーツと眺めた。

「いやー、誰も知らないよお」

もちろん、並べた

写真にはボカシはかかってない。受付用の写真なのだから・・・。

ゆいの話では、学年がひとつ違いながらもいっしょに受ける授業もあり何度か言葉を交わしたコトもあるらしいが、やっぱり、コスプレ姿でしかもプリクラだとかなり印象が変わるんだろうか。

「えーとですね、もうこれ以上探ったりするのめんどくさいんでズバリ言いますが、この子知ってますよね！」

僕はゆいの写真をつかんで、センパイふうかの前に差し出した。

少しの間、センパイふうかはぼんやり写真を眺めていたが、やがて、

「あーっ！知ってる、知ってる！！」

と、少しコーフン気味になった。

「あなたの後輩ですよね」

「そうそう、あたしのいっこ下！」

そこで僕は少しニヤリとした。センパイふうかもニヤニヤしだした。

「これは、いちいち念を押さなくてもわかっていただけたと思います、ここちでお仕事してることはお互いに学校の中ではナイショでお願いしますね」

「うんうん、そりゃもちろん」

幾分安心した僕は、それから素朴な感想をいくつか述べた。

「しかし、実物は、あなたと後輩は全然違う顔なんだけど、プリクラだとなんだか雰囲気似てますな」

「ふうーん、そうなんだ」

「あと、性格もかなり違うように感じますが、すぐにニヤニヤするところはいっしょなのね」

「あつ、わかるわかる、あの子いつもニヤニヤしてるもん！」
と、ヒトのコトを言いながら、センパイふうかもずっとニヤニヤしてる。

「それからね、僕があなたをエライと思ったのは、白のフリをしない、ブラックさを隠してないところね」　まあ、もちろん場合によつてはぶらなくちゃいけないんだけども、そのヘンもお上手とみた。

すると、相変わらずニヤニヤしてるセンパイふうかは、

「そんなにブラックでもないよ」

「ん、そう？」

「ブラックに近いグレーだけど」

「・・・あははは」

「へっへっへ」

また一名、個性的なヒトが入ってきたのだった。

さて、ここで唐突に『現在』に戻る。

基本的には、働いていた五年の内の後半一年、つまり2010年の最初らへんからその年の12月くらいまでのハナシがメインなんだけど、突然それよりも『過去』にさかのぼったりいきなり『現在』に来たりもいたしますので、ご注意くださいませ。

今ではもう、だいたいのヒトが引退してたり違う店に移ったりしてまして、まあなんにしても登場人物には許可をいただかなくてはと思い、何人ものかたに連絡してみました。

すると、なんとというコトだ！「いいよー」とか、「ま、プライベートなコトを特定されなければいいっす」とか、「はいはい」または、「大丈夫です」・・・など、すべてのヒトたちが、当時の名

前を出すコトも込みで快く承諾してくれたのだ。

僕はシビれた。感動で涙もちよ切れた、いや号泣した。そして、星空を見上げ、「もしあたいが出世したあかつきには（するかわかんないけど）、この作品に出てくるすべてのヒトたちに大盤振る舞いするわ!」と固く誓ったのであった。

いつものように僕は、受付所の裏の作業場で、パソコンの前に座って作業してた。女の子が少ない夕方前の時間、そしてその子たちもみんなお仕事で出払っていたんで、そばでおなじくパソコン作業をしてるかとうーんとたまたま二人きりであった。

そこで僕はかとうーんに素朴な質問をぶつけてみた。「あのですねえ、ここんちで一番のルックスのヒトは誰だと思いますかね」所詮この業界は人気商売である。ルックスやスタイルがいいだけでもダメなんだけど、やはりまずはそのヘンが重要視される。

そして僕は女の子たちに、そんな世界の理不尽さや、それでも必死こいてがんばらねばならんだ!といった苦労、だけでもヒトはみんないっしょなんだよという、矛盾だらけのコトをすべて伝えていかなくてはイケないのだ。

作業の手を止め、かとうーんはパソコンの画面から目を離し、僕の方を見て、

「それは、個人的な感想でしょうか、それとも一般的な意見でしょうか?」「うーん、まあ両方やね」

「そうですねえ・・・」

しばらくかとうーんは考え込み、

「やっぱり、みみ氏じゃないですかね」
と答えた。

ほぼ予想通りの答えだったんで僕も、

「やっぱみみ氏かなあ」

と言った。すでに今まで何百人もの女の子の面接をしたが、初めて会ったときの、可愛い！または、このヒトは人気出る！といった衝撃度は、歴代で軽く五本指に入る。

「でもさ、みみ氏って不思議だよねえ」

と僕はまだ素朴な疑問を発した。

「なにがですか」

「だってさあ、みみ氏って、まあ誰から見ても可愛いって思えるだろうけど、パーツ的に見たら、パツチリした目以外はむしろ欠点の方が多んじゃない」

「あー、そうですね確かに」

「でもさ、バランスとか雰囲気で、そういうのもプラスになって可愛らしく見えるんだよねえ」

「あー、そうですね確かに」

そんな会話を交わしていると、当のみみ氏が出勤してきた。

「ミヤーミヤー！」

「ミヤーじゃなくて、おはようございますって言いなさいよ」

すると今度は裏声で、

「おはよー」

とフザケた声を出すのである。

「もうええわ・・かとうーん！このヒトは中身も理解できませんよ、あたいには」

「あー、そうですね確かに」

「ワルグチ言っな、ミヤーミヤー！」そして、センパイふうかも登場する。夕方になり遅番のヒトたちが続々出勤してくるのだ。

「うーっす」

と言いながら入ってくるセンパイふうかに、「オッサンじゃな

いんだからさ」

いちおう文句をつけるが・・・馬の耳に念仏である。

「へっへっへ」

ニヤニヤするだけだ。

ふと僕は、みみ氏とセンパイふうかの顔を交互に眺め、思い付いたコトを言ってみた。

「みみ氏は似てる芸能人ってあんま思い浮かばないけど、ふうかセンパイはあのヒトに似てるね・・・」

「・・・誰？」

一瞬警戒するような表情になる。

「山口智子・・・良くいえばね」

ニヤニヤ顔になったかと思いきや、また警戒の顔つきになった。

「じゃあ、悪く言ったら？」 「アンパンマン！」

「・・・死ねっ！！！」

すると、後輩ゆいもニヤニヤしながらやってきた。「おはようございまーす♪」

そして僕は、後輩ゆいの様子を見ながら、突然素晴らしいコトを思いつき、ひとり腹を抱え大爆笑してしまった。「ブッハッハ！」

「えーっ、なあにー」「キモーい」それから、「ん、どした？」

という後輩ゆいに、僕は気を取り直し、神妙な顔を作って、訴えた。
「今ワタクシは素敵な大発見をしました！」 イジョーに勘のスルドい後輩ゆいは、これはきっとロクなコトではない！と素早く察知したようであつたが、それでも気になってしょうがないらしく、怪訝そうな表情を浮かべながらも、

「言ってみなさいよ！」

やや強めの口調で、目をギランとさせた。

「怒らない？」

「そんなの聞かなきゃわかんないでしょ！」 絶対怒られると確信したが、それでも言わずにはいられなかった。

「ゆいさん！あなたにヒジョーに似てるヒトを発見しましたっ！」

「誰っ！？」

「言つていい？」

「早く言えつての！」

「あのね・・・おでんくん」

一時、NHKで放送されてた、リリー・フランキー作のアニメの主人公、たらこ唇のもちきんちゃくである。一瞬の静寂のあと、あたりは爆笑の渦に巻き込まれた。

やった、やった！

しかし、たつたひとりだけ、「・・・」

無言。数分後、僕のからだは血の雨となったのであった（ホント）。

いつもの如く所定の場所で、出勤中のオススメな女の子たちを紹介する新着情報や、まいにち書いてるブログの更新などをしてるとそばに座ってる出勤して来たばかりのみみ氏が、相変わらずの裏声というか、アニメこども声で僕に話しかけてきた。

「ボーナス、ボーナス！ボーナスくれよー！！」

まいどのコトなんで、僕はさりげなくズボンのポケットをまさぐり、「はいよ」と言いながらみみ氏にお金を手渡した。

「30円じゃダメだよー、ミャーミャー！」

「遠慮しないでそれで土地でも買いなさい」

「買えないよー、ブーブー！」 それ以上かまっぺられないのです
みやかにスルーする。

すると、僕を挟んで反対側のそばに座ってた、パヤパヤみゆが「
ゲッ」・・・突然ゲップをしゃがった。まったくこっちがゲッです
わ。

「こらこら、女の子が人前で平気でゲップするのやめなさいよ」

「あ、わりい」

わりいじゃねえし・・・。

「だいたいアンタねえ、いくらここんちに来てから一年以上経っ
たからって、最初とキヤラ変わり過ぎですわ！」

パヤパヤみゆのパヤパヤは、ふわんとメルヘンチックな雰囲気
表現したコトバである。入ってしばらくは天然ぶりっこ風であった。

そして他にも、みみ氏やおでんゆいもここに来てすでに一年
が経過してる。ちなみにセンパイふうかは、まだ一週間しか経っ
てないというのに、すでに三年もいるような落ち着きっぷりだ。

「だつてさあ、パヤパヤするのもう疲れちゃったよ」

「だからって、あまりにも豹変し過ぎだろそれじゃ」

「ごめーん」

ニコニコ柔らかく微笑んでいれば、可愛らしい癒し系のキャラな
のに。しかもこのヒトには巨乳という武器もある。

まあと

すると、僕を挟んで反対側のそばに座ってた、パヤパヤみゆが「
ゲッ」・・・突然ゲップをしゃがった。まったくこっちがゲッす
わ。

「こらこら、女の子が人前で平気でゲップするのやめなさいよ」

「あ、わりい」

わりいじゃねえし・・・。

「だいたいアンタねえ、いくらここんちに来てから一年以上経ったからって、最初とキャラ変わり過ぎですわ！」

パパパヤみゆのパヤパヤは、ふわんとメルヘンチックな雰囲気表現したコトバである。入ってしばらくは天然ぶりっこ風であった。

そして他にも、みみ氏やおでんゆいもここに来てすでに一年が経過してる。ちなみにセンパイふうかは、まだ一週間しか経ってないというのに、すでに三年もいるような落ち着きっぷりだ。

「だつてさあ、パパパヤするのもう疲れちゃったよ」

「だからって、あまりにも豹変し過ぎだろそれじゃ」

「ごめーん」

ニコニコ柔らかく微笑んでいれば、可愛らしい癒し系のキャラなのに。しかもこのヒトには巨乳という武器もある。

まあとりあえず巨乳はどうでもいいか。

ん、風俗店のハナシだろって？

いやいや、下ネタ系は極力書かないんす。他にネタいっぱいあるし。

「ほら、ばやにお仕事入ったぜ」

「えーっ」

「えーじゃない。あんたここんちにナニしに来とるん」

「・・・仕事」 「ならさっさと行く」

「へーい」

よっこらしよつといった感じで店を出ようとする。

「ちよいとばやさんや」

「なあにー」

「ちゃんとパパパヤしてきなさいよ」

「あいよー、パパパヤしてくるよー」

僕だっていちおう店長のはしくれである。お仕事はきちんとである。手抜きサービスはいかん。

だけでも、ぱやとか、他にもだいたいの人には、サービスに關してけっこう信賴しておる。

みんなやるときはやる！のだ。くだらないハナシをしてばっかではない！僕だって、ふざけたフリしながらその実かなり必死こいて働いてるのだ！！・たぶん。

そして、ぱやとああでもないこうでもないと言ってるうちに、みみ氏もお仕事に向かっていた。みみ氏が座っていた椅子の上にコピー用紙が一枚。なんか描いてある。

うさぎやネコなどの動物を中心とした落書き。他にも、あめ玉や車なども。どうやら絵のしりとりのようだ。

動物大

好きなみみ氏は、絵心のあるヒトでもあったのだ。

ここでいきなり、いったん『現代』に戻る。つまり、2011年5月のコト。

夜一人で晩酌していると、飼ってる小鳥のぴよが騒ぎ出したので、渋々カゴから出した。とにかくこいつはとてつもなくきかんぼうなメスなのだ。

カゴから出るなりぴよは、あたりを飛び回り、気が済むと僕のアカタマに止まり糞をして、満足すると今度は僕が手にしているグラスに乗って焼酎を飲み始めるのである。まあ好きにすればと、しばらくやりたいようにやらせていたのだが、醤油をかけた白菜のお新香をむしゃむしゃ食べ出したところで、ふと、はて鳥にお新香は大丈夫なんだろうかと考えた。ま、考えたってペットにあまり興味のない僕にはわかるはずもない。

ここは、動物・生き物博士のみみ氏に聞くしかない。

（今、ぴよが白菜のお新香食べてるんすけど、大丈夫ですかね）
自分に興味のないメールに対してはつれなくスルーする気まぐれ
みみ氏であるが、さすが動物命のヒト、すみやかに返信がきた。エ
ライ！（ダメ、ダメ、塩分ダメだよー！）
アドバイスありがとうございます。

そして、前回のおハナシを書いたあと、ぱやに報告した。

（ぱやのコト、誉め殺しにしたいよ）

（え、ホント！？すぐ見てみるー！）

しばらくして・・・

（最初のハナシがゲップって・・・）

（いやいや、いったんサゲておいて、そこから一気にアゲるんす
よ、そっちの方が効果的じゃないですかあ）

（うんわかった。じゃあ次回に期待するね）

（もちろんさあ）

あまり期待はしない方がいいと思う。

さて、今までの登場人物をいったん並べてみる。

おでんゆい、センパイふうか、かとうーん、ティーチャーももこ、
みみ氏、ぱや、それから僕^{たもつ}。

このあとまだまだ登場する予定であるが、あんまりいっぱい
も読んでるかたはわけわかんなくなっちゃうか。

とりあえず今回はあと二名。かつての早番エース、表バン（チ
ョー）このは。それから、『J』で一世を風靡した、キリッと系美
女りっくん。

まずは、表バンこのはから。小柄でグラマーなヒトである。グ
ラビアアイドルというかバラエティーアイドルのあるヒトに似てお
る。

僕もこのはさんもまだ現役時代だった二年くらい前は、新着情報とかに、。。。。似！と、その芸能人の名前をリアルに書いていたのだが、あまりにもたくさんさんのヒトたちに似てると指摘されていたので、「そのヒトの名前出すのやめてもらおうかな、バレたらコワイから」

そう言わたいきさつがあるので、いちおうここにも書かないコトにする。

このヒトは、ヒトとしても女としても、長所と欠点の両方がそれぞれたくさんあるヒトである。

僕としては、このヒトの、単純というか、ヨロコビも怒りも優しさも、みんな素直に表現するところがヒジョーにいいと思う。一度、もう二度と会うコトはないだろう、というくらいのもめ事もあったが、仲直りできてしかもそれ以降腐れ縁状態となってしまうた。とても喜ばしいコトである。

この物語を書き始めたあたり、なかなか思うようにハナシが進まなかったのだが、このはさんの、（ブログのときみたいに気楽に書きなよ）のヒトコトでなんとか書けるようになった。ありがてえこった。持つべきモノはなんとやらであります。

んでもって、もう一人のりっくん。

二、三年ほど前は、表の番長このはに対し、裏の番長りっくんといつていた（僕だけ）。だが、けっしてりっくんがコワイヒトで影でヒトビトを仕切ってるというわけではなくて、お客さんのみならず女の子たちの間でも多数りっくん信者というモノが多数存在してたんで、そうしただけなのである。僕が店長をやってた三年半弱の間で、楽に百人以上の女の子の面接をしたわけであるが、りっくんの場合、印象深い面接トップ3に軽く入るであらう。

その詳細はまた次回。

さて、まずは面接を受けるきっかけというモノをちょいと解説いたします。もちろんお店によって多少違いはありますが、「J」の場合、自分でHPを見て問い合わせして来るヒトが30%くらいで、残りの70%ほどはスカウトさんに連れられて来る。

りつくもスカウトさんといっしょに来たクチである。Aくんという若くて可愛らしい顔していつもニコニコ笑顔のあんちゃんであった。店に連れて来る前の電話で、「チョー綺麗な子ですから！」と自信満々であった。

ま、そんな風に期待させるだけさせといて、ふたを開けてみたならば、あらまあビックリ！オーマイガッ！なんてケースもままありますが、Aくんは実際ヒキが異常に強いのだ。「神の子」とも呼ばれている（僕にだけ）。

期待に胸をふくらませAくんと女の子を待っていると間もなく登場、はい、Aくんのコトバにウソはありませんでした。いや、期待以上のヒトであった。キリツと美しくそして強い目力、个性的なかなりの美人さん。しかし、話し方や態度は礼儀正しく柔らかい。飛び上がって喜びましたね、ほかあ。

なんでまたそこまで・・・ってくらいの手の傷は確かにマイナスポイントではあるが、そんななかまわん、マイナスの何倍ものプラスがありますな。

平和な雰囲気の中、三人でおハナシをする。面接後即体験入店でしかも未経験者なので、説明するコトや教えるコトが山ほどある。しかもあまり緊張しないようにその辺も気を配ってやらなくてはいけない。

給料の説明や、働くに当たっての心得らしきモノを伝え、それから、プリクラ撮影、プロフィールの作成、さらには仕事の指導なども細かく伝えていかななくてはならない。さあこれから忙しくなるぞあ、と素早くアタマの中で段取りを組んでると、「ちょっとだけ女の子と外で話してきます」Aくんが僕にそう言ってきた。「あ、は

い、わかりました、どうぞ」なんか少しヘンな空気だな、と思いつつも、僕は一人でそのあとの予定を考えいた。

ところがなんてコトだ、15分経っても二人は戻ってきやしない。どうしたんだろ、と考えてると、さらに20分ほど経ってAくんから「店長、ほんとにすみません」と電話がきた。「どうしました？」嫌な予感全開であります。

「・・・あのお、女の子怒って帰ってしまいました！」

「・・・なにになに？　どういうコト！？」

「あのお、女の子はすでにいっしょにはいないんでしょうか？」
まあ、帰ったって言うてるんだからそうなんだろう。だが、未練たらたら残るではないか！　「そうなんです。僕の説明不足で、ハナシが違う！　って帰っちゃったんです。とめることができませんでした」

またAくんも軽いノリでテキトーに連れて来ちゃったんだろうなあ。チャラいからなあAくん。いつものように、女の子を連れてきたらそのまま、あとはお任せします！　って帰ってくれたほうが良かったのになあ。

スカウトさんには二つのタイプがあって、Aくんのように、連れてきたらもうアナタ任せお店任せですってタイプが一つ。このタイプは、一見無責任のような感じであるが、こっちからしてみれば逆にそのほうが楽なんである。

もう一つは、入店してからも親身になって女の子のハナシを聞いたり相談に乗ったりとマメなタイプ。

しっかりしててニンゲンもできていて、こっちに的確なアドバイスも与えてくれたりして、そういうヒトはヒジョーにありがたいんだけどわりと少ない。　中途半端に首を突っ込まれたりして混乱してしまうコトも多いのだ。

僕からしてみれば神の子Aくんは、いくらチャラ男であっても、

いい子ばかり連れてきてくれるし、愛想はいいし、余計なコト言
つてこないで申し分ないのだが、女の子からしてみたらけっこう
ヒンシュクもんである。

実は、おでんゆいもAくんからの紹介なんだけど、体験入店のあ
と電話ちようだいね、と自分で言っておきながら（いくらお店任せ
のヒトでもそれくらいはする）、実際おでんゆいが電話すると、「
え、誰？」そう言っておでんゆいを激怒させたのである。「もう二
度とクチきかない！連絡とらない！」とイカっていた。

まあそれはともかくとして、モンダイはりつくんである（最初は
りくであつた）。名前まで決めたというのに、『J』のカリスマに
もなれるほどの逸材だというのに、果てしなくもつたないコトよ
のう。

だが、それから三週間後、事態はまた変わった！

「あの、Aですけど・・・」

神の子Aくんからの電話であつた。

「あ、どもども」

こないだの一件をすまながつて、新しいコを連れてきてくれるん
かなあ。でも、いくら神の子とはいえ、あのコ並のヒトは難しいは
ずだ。まだ前回のショックを引きずってる僕は、悪いけど今日
に限ってはちよつとやさつとじゃ納得せんからね！と素早く心の中
で呟き、優しくAくんと言った。

「今日もいいコ待つてますよー」

すると、Aくんはなんとなく話しづらそうに、「はあ、あのお、
これからそちらに伺うつもりなんですけどお・・・」

なんだ、どうした？横にヒジョーにでっかいヒトですか？それと
もお顔が接客業に向かないようなかたなんですか？どーせ今回はそ
こそこのヒトを連れてこられたって満足いくはずないんだから、い

っそのコト、とてつもないヒトを連れてきてほしいモンだ！

心の中で思っているだけだが、これはただの八つ当たりである。

それとは裏腹に、再び優しい声色を出した。「いつでもお待ちしてますっ！こっちに着くのは何分後くらいですかあ？」「いや、

あの、もう下にいるんですけど・・・」

そうか、そうか、この前のお詫びにと思い、違う誰かをと急いで声をかけてみたものの、下に来たところで突然自信がなくなったというわけだな。

「結果はともかくとして、とりあえず上がってきてくださいよー」
わしだって鬼や悪魔ではない。人気商売なんで、今回はちよつと・
なんてケースだってトーゼンあるが、冷たくお引き取り願うなんてコトはしませんよ。

「はい、じゃあ向かいます・・・でも、前もって一つ言っておくコトが・・・」
なに、なに？はつきり言ってみなさい。どんなヒトが来ててもわしはもうビクともしないけんね。あ、そつか、そばに女の子がいるんじゃ、特に外見的なコトは言いづらいつてわけだな。うん、なーんも言わんでよろし。

「まあとにかく、すぐに上がってきてください」

そーだ、そーだ、エンリヨはいいからエレベーターで五階まで速やかに上がってくるのだ！

「・・・あ、いや、その前にこれだけは・・・」
そんなに？そんなになのか、そのコは！？

「大丈夫ですよー、もう飲み物も用意してますから」

Aくんよ！わしはもう覚悟ができとるぞよ！カモン、カモン！

「今からいつしよに行くコ・・・」

「来てからでいいですよー」
もうわかったからいいって、いいって！

「・・・この前怒って帰っちゃったコなんですけど・・・」

「はっ!？」

正に予期せぬ展開であった。

「まずいですか、やっぱり」・・・ナニを言っておるのだ、このヒトは。

「全然まずくないです!だから、お願いですから今すぐエレベーターに乗ってください!」

気まずそうに苦笑いのAくんといつしよに再びやってきたりつくんは、相変わらずスツキリキリっと礼儀正しい美人さんであった。

「あとはもう大丈夫です!」　そう言いながら、速やかに僕はAくんを帰そうとした。

「じゃあ、あとはお任せします」

こないだのコトがあったんで、Aくんも素直に素早く帰っていった。

「よく戻ってきてくれましたね」

「あのあと別の店に一日行っただけですけど、傷のコトで・・・」
バカだなあ、と僕は思った。眼鏡をかけてるからといって指名を避けた球団のコトがアタマに浮かんた。かつてのヤクルトスワローズの名捕手古田が、どれだけ球界で活躍したのかわかっておるのか!と一瞬憤りを感じたが、考えてみれば、そういうもったいないコトをしてくれたから戻ってきてくれたんだもんなあ、とありがたがるコトにした。

「これから、お仕事に必要なコトをキッチリ教えますが大丈夫ですかいな」

「はい、もう大丈夫です」

「あなたはきっと人気者になると思います。だからあえてハードルを上げて厳しくするところもあると思いますが、そのヘンも大丈夫かね」

「はい、大丈夫です」

それから間もなく、りつくんはここんちのカリスマ的存在となった。

出会ったヒトたちすべてに思うコトですが、特にこういう経緯があると、縁というモノを深く考えさせられますなあ。

さて、今度は撮影現場の裏話である。

撮影というと、だいたいは店の待合室か近くのホテルでとなりますがね、たまあに遠出をするときもある。

『N』というわりと大手の風俗サイトの、しかもカバーガールムービーといった一番おいしい場所の撮影は、新宿のきちんとしたスタジオで撮っていた。

今から一年ほど前に、りつくんもこの撮影をしたのであるが、これはそれよりさらに半年くらい前の、カピバラ（キチ。イ）そらを撮ったときのエピソード。

そらさんは、おっとり天然癒し系風のヒトである。本指名率もヒ

ジョーに高かった。

それから、最初のうちはともかくとして、ほとんどのヒトは慣れてくると僕とかにタメ口になってくるんだけど、まあそれでもまったくかわらないというかむしろそのほうがいいんだけど、中にはしばらく経っても敬語ばかりの見上げたヒトたちもいます、このおハナシの出演者の中では、みみ氏、りつくん、そらさんがそういうタイプですな。

さっき、おっとり天然癒し系と書いたが、個人的には、そんなにおっとりしてとは思わないし、天然とも感じない。ただ、おでんゆいのようなふんわりした雰囲気はあるし、敬語なども含め、ぶりっコしてるといよりは、乱暴なコトバや態度にならないようにとても気をつけてるといった感じですね。そんな意味合いのコト、本人から直接聞いたりもしたんで間違いはないだろう。

ま、それはともかくとして・・・

「カピバラさん買っていきます！」

「駅でカピバラそらが唐突に言った。

「それ持って撮影に挑むってコトですかね」 「そうですよお、

だってカピバラさんがいないと不安ですもの」

「そんなのはもうこっちも慣れっこになってるわ！」

「へいへい。ではこの駅ビルで買ってくださいよ」

「はぁーい」

エスカレーターに乗ってオモチャ屋さんに行く。店の前で待ってたら、巨大なカピバラを抱いて戻ってきたやつた。

「そんなにか？ そんなにおっきいのが必要なんですかっ!？」

「そうですよお、今日の撮影ならやっぱりこれくらい大きな子じゃないとダメですよ」

「・・・へいへい。ま、とにかく行こーぜ」

中央線、満員電車に乗り込む。荻窪で丸ノ内線に乗り換えである。改札を出るとき事件は起こった。

「あーっ！」

「ん、どした？」

「カピバラさん、電車に置いてきてしまいました！」

「・・・あーあ」

約束の時間まであと30分、もう猶予はない。「忘れたものは仕方ないっす。時間もないからもうあきらめて行くっす」

僕はなだめにかかった。しかし・・・

「イヤです！」

「イヤったってしゃーないやんけ。カピバラは東京駅に向かってるんだもん」

「取りに行つてきてください！」

「・・・なんちゅーやっちゃ。

「俺がか？今から取りに行くのかい？」

「はい、そーです」

「ちよいと冷静に考えてみたまえ。これからあなたが一人で撮影場所に向かつて、あたいが東京駅まで取りに行くとなります」

「はい、そうしてください」「だからちよつと待てって。カピ

バラがいないと笑顔で撮影できないから取りに行けと言ってるんでは、おたくさんは？」

「そーですよ。あと、カピバラじゃなくてカピバラさんです」

「・・・それはこのさいどーでもよい。あのね、今から取りに行つたところで、カピバラと共に戻ってくるのはすでに撮影が終わる時間ですよ、物理的に！」

もうどうやってもカピバラといっしょに撮影するのはムリ！と現実を突きつけられたそらは、しばらくフリーズしていたが、ようやくあきらめしょーんと現場に向かった。

「いちおあなたもこの道のプロなんですから、なんとか気持ちを切り替えてちゃんと撮影したまえよ」

「はぁーい」

とはクチばかりで、このヒトの顔に笑顔が戻ったのは、撮影が終わってカピバラを東京駅に取りに行ったあとである。

なので、美容室できちんと髪をセットしたのも、この日のために二セット下着を購入したのも、カピバラがないコトですべて台無し、ムービーはすべてしょぼーん顔であった。

さて、これは『現在』のおハナシ。

ふと気づ

いてみたらば、約一年前のハナシをメインに、たまに『現在』やメインの時代よりも『過去』に行ったりするとお断りしておきながら、どうもメインのハナシがさっぱり進んでないようである。しかも今回も『現在』なのである。

まあ、書いてるニンゲンがいい加減なんでしかたねっす。

次回こそは無事メインイベント！になつていくはずである・・・たぶん。

先日久しぶりにティーチャーももこと麻雀の対決をした。

僕が『J』を辞めた直後は、引きこもりの僕を気の毒がつて、月に二、三のペースでかまってくれていたのだが、ティーチャーももこがヒジョーに忙しくなったり、あたいはあたいで引きこもりに加え、大きくすぶり野郎にまでなったりしたんで、こないだの対決はおよそ三ヶ月ぶりであった。

まずお茶をして一時間ほどおしゃべりをしたあと、十数時間ただひたすら戦い続けるというのがいつものパターンなんであるが、合流したときティーチャーは空腹だったらしく、「まず、先に何か食べませんか」と言った。

異論のない僕は、瞬間、(ラーメン、ラーメン!)とアタマの中で叫んだが、すぐさま、ティーチャーはラーメンあまり好きくないという事実を思いだし、「・・・ラーメン以外ですよね」とお伺いしたらば、案の定、「はい、ラーメン以外で」とのお答えが速やかに帰ってきた。僕の今の住まいであるH市の放射線通りを二人で歩きながら、ファーストフードのお店を指差し、あそこはどうだろうかと尋ねると、うちはまったくかまいませんが、おっさん(!!)がまずそういう店を提案するのはいかなモノかと、軽くケーベツするように、そして思いきりニヤニヤとしながら僕を見た。『J』にいた頃はもちろんのコト、いまだに、お茶やゴハン、または飲みとかは、このティーチャーやセンパイふうか、もしくはカピバラそらといった若いヒトたちとばかりで、だもんだからあたいはあなたたちに合わせてるんす!あたいがそーゆーとこ好きってわけじゃないんだい!と、やや逆上しながら訴えると、まあまあ・・・それでは吉野家に行こうじゃないですか、ウチがおごりますからと、穏やかに、しかし相変わらずニヤニヤしながらそう申した。

ある一部分だけはイジョーにプライドが高いものの、それ以外の大部分においてはプライドのプの字も持ち合わせてない、てんでだらしがなく適当ダメニンゲンのあたくしであるから、ヨロコンで牛鍋丼280円也をごちそうになった。

満足して吉野家を出て、いつものお茶飲み場へ向かい、お互いの近況報告をしつつ、ミルクティーを飲み干し、「今日はタネ銭をこれだけ用意してきましたっ!」と鼻息荒くティーチャーに報告と、

「本日も正々堂々真剣勝負で！」と宣誓した。

んでもって雀荘に向かったわけであるが、タタカイが始まれば、十数時間もの間、お互いほとんど私語なんかしないのである。発するコトバは、「リーチ」とか「ロン」とか、「マンガン一枚」もしくは、「一枚借り！」（これは僕しか言わない）・・・すべて麻雀に関わるコトバのみである。

これはこれでとっても貴重なひとときである・・・十何時間はひとときではないか、まあいいや。

四年ほど前だったか、あおいという名の店の女の子と、まるで男通しのダチみたいな関係になった。

たまに飲みやカラオケ、またはお茶やゴハンなどもちよいちよいしてたのが、お互い本好きというコトで、遊び場所はほとんどマン喫であった。

八時間とか十時間密室にいて、お互い好きな本を読んだり居眠りしたりして、その間に交わす会話は、「これ食うか？」「いや、いらね」「そろそろ出るか」「ああ・・・そんな程度だったが、それはそれでなかなか楽しい空間と時間であった。

あおいは、引退後も、去年の夏には（入籍したぜ）との連絡や、去年の暮れあたりは（産まれたよー）といった報告のメールをよくしたりしてくれていたのだが、こつち側の都合で連絡が取れなくなってしまった。とても残念無念である。

おっと、ハナシを元に戻そう。

ここ何回かの、ティーチャーと僕の傾向であるが、ティーチャーは序盤調子がいいときが多い。しかし、時間が経つにつれ、疲れ弱ってきてしまい、終盤じり貧になる。一方わたくしの場合、ここ何カ月かのスランプ、くすぶりがなかなか抜けず、いつもスタート

でつまずき、終始なんとか負け分を取り戻そうと四苦八苦してる、そんな情けない状況なんである。

ムカシっからばかあ勝負弱いのである。いったんくすぶり出すとしばらく復活できない。

ただ、そんなところにギャンブルの魅力が凝縮してるんですな。

リーチ合戦やめくりっこ勝負にあっさり負けて、相変わらずよいなあ、くすぶってんなあ、と、内心苦笑いしたり悔しがりながらハネマン一発ツモ！なんかとはちよつと違った、自虐的・ドM的な快感が打ち寄せながらも、一方では、次は負けないぞ！と必死コイたりするという、矛盾した感情ごちゃまぜのなんともいえない刺激。

五時間を越したあたりから、ティーチャーの顔にあからさまに疲労の色が浮かんでくるのだが、その日は、ほんの十秒ほどであるが、珍しく居眠りまでしてしまった。

ティーチャーの体力的ギブアップと、いくら必死こいても負けを取り戻しきれない僕のフトコロ的ギブアップが重なった正午に、タカイはお開きとなった。

今回も、十三時間あまりの激闘でありました。

激闘のあと、僕がムカシから愛顧している、古くさいけれどもなかなかうまい中華屋さんへと向かった。

ここは、僕の好きなラーメンもあるし、他にもゴハン類がいっぱいあるんで、ラーメンが好きくないティーチャーでも大丈夫なんである。そこでまた、ワンタンメン600円也をおごっていただいた。

このおハナシに出てくるヒトたちすべてに対し常日頃思っているコトであります、わたくしがヒジョーに苦しい時期に、快くおごってくれたり、お金を貸してくれた、窮地を救ってくれた、ティ

ーチャーももこや、センパイふうか、カピバラそら、それからおでんゆいには（まだ他にもいるけど）特に、いつか大盤振る舞いもしなくてはいけないのである。

・まあその前に、出世しないといけないんだけどさ。

それはともかくとして、ヒジョーに安いレートで麻雀でリハビリをしました。九割方復活できた！・・・と思う。

ホントは、前は、『現在』のおハナシをさくつと書いて、それからメインの一年前に突入するつもりであったが、『現在』のハナシだけで終わってしまった。

だってさ、『現在』のハナシはついこないだのコトを書けばいいから、記憶も鮮明だけど、一年前のハナシだとほとんど忘れてきているんだもの。

んでもって、前回のハナシも、予定より長くなったクセに一番書きたかったコトを書くのを忘れてたぞんす。

なのでとりあえずそれを書いてみる。

・ティーチャーももこは、麻雀の対決前（次回のタタカイは今の土曜日！）、ご自身のブログでこんなコトを書いていた。

麻雀でもそれ以外でも、差し込みはいたしません・・・と。

なので、それを読んでおもわずニヤリとしたあたいもお返し。

12時間以上、ひたすらパイを握ったりいじくったりしてましたが、ティーチャーのパイは一度も盲牌モウパイしておりません。

あれ？

もつとさわやかにキマると思ったのになあ。

おかしいなあ。

書かなきゃよかったかなあ。

・・まあいいや。

次へ進もう。

ようやく戻りました2010年。

5月らへんのそれぞれの在位期間はというと・・・。

りっくん、二年選手。

表バンこのは、おなじく二年選手だがこの頃ご卒業。

おでんゆい、みみ氏、カピバラそら、ぱや、一年選手。

ティーチャーももこ、3ヶ月ほど（この前確認した）。

センパイふうか、こないだ入ったばっか。

この頃は、表バンこのはの卒業時期であるが、おでんゆいもカウ

ントダウンが入っていた。

フツ、友達や知り合い、またはカレ氏、身内などにバレそうになったときには、HPの写真のボカシを濃くする。もっと切羽詰まってる場合はいったん写真をなくしてしまう。

そうすると、指名や予約が減る可能性が大になるのだが（何度もおなじ子を指名してる、つまり本指名の場合はそれほど痛手をこうむらないけど、初めての子だと写真も無しでは、お客さんもなかなか予約は入れてくれない）、背に腹は変えられない。

そして、それだけでも稼ぎはかなりマイナスとなってしまうのに、おでんゆいはヤバイレベルがもつと高くて、出勤簿にすら載せないばかりか在籍表までも外していたのだ。

これではマトモに仕事が入るわけない。

苦肉の策として、連絡先を知ってるごく一部の本指さんに、いついついちゃんの出勤予定が入ってますがご都合はどうでしょうか？とメールで伺ったり（ありがたいコトにこれはかなり効果があった）、たまにしかない、特定の子に予約を入れないで店に来てから決めるといったお客さんに、出勤簿には載ってないんですが・・・と言いながらおすすめて写真指名してもらうか、または、これもあまり期待できないフリー（おまかせ）頼りとなる。

前年の暮れは、持ち前のキャラや気配り、それに加えて努力と根性で、月間本指名率NO1にまでなったのに、そのときと今とでは天国と地獄ほどの開きがある。

それでも、そんな過酷な状況でよく半年近くも粘ってくれたものです。

限界が近づいてきたある日のコト。閉店後、店は僕とゆいの二人きりになっていた。

「もうそろそろ無理かなあ」ゆいがポツリとそう呟いた。

さすがの僕もこの状況下では、まだ大丈夫だよ、イケるよ！など

と適当なコトは言えない。」「そうだなあ」

素直に応えた。

「一番キツいのはさ、稼ぎが減ったってコトよりも、おまかせのヒトばかりになったってコト」

「うん・・・」

「あ、でも誤解しないでね。おまかせなんかつきたくないって意味じゃないから」

「わかってるよ」

少し説明を付け足すと、僕がここんちの店長になったばかりの、このときからさらに二年ほど前、主力の女の子たちは、フリーの仕事をまわすと、だいたいの子が、「えーっ、フリーなんか行きたい！」「と拒否していた。そういう態度をとる子たちはだいたいが可愛らしくて才能もあるはずなのに、せっかくの能力をあまり発揮してないヒトばかりであつた。

そして、断っておきながら、待機の時間が長くなると、「ヒマだーヒマだー」とブツブツ言い出す。

女の子は大切に！というのがモットーの僕も、さすがにそれはイケない！と、そのあたりの意識革命はかなり強力に行った。つべこべゆーな！そんなにおまかせがイヤなら、実力で予約で埋めてみるい！・・・と。

努力の甲斐あつて、全体的に意識はかなり高くなったけど、なかに、実際は僕の努力よりも、それ以降に入ってきた女の子たちに恵まれたってコトが一番デカかったんす。

おつと寄り道が長くなった。もとに戻そう。

「去年の暮れはさあ、店長に言われて気合い入れ直して、結果も出したじゃん」

「そーだな、あんときは凄かったな」

店全体の本指名率は約25%。おでんゆいは入店以来、平均値は上回っていたものの、その数字は僕にはとても不満で、あるときこう言った。「毎月30数%だけど、キミの実力はこの程度かね」そこで、おでんゆいも発奮した。お互い基本から見つめ直し、フツ―の子なら、もう無理！できない！って、まず音をあげて辞めてしまうであろう厳しい注文も、こいつなら大丈夫と思って、遠慮も妥協も一切しなかった。

そしてひと月後、反則技（これも大きな、そんでもって一概に否定もできないテーマなんで、おいおい語っていく）も使わず、60%超の数字を叩きだし、当時二回目だったかの卒業を控えていたりつくんの後継者はこいつだ！と確信した。

だけでも、2009年の暮れの絶頂期が、地獄への入り口にもなってしまった。

まあ、そのへんもいずれ語っていきますが、そんな過酷な状態でありながら、おでんゆいは、生涯忘れられないカンドー的な置き土産を残していくのである。

それは何かというと・・・

次回のお楽しみとする。

はつきりと、いつ『J』を卒業するかは決めてなかったものの、おでんゆいは確実にカウントダウンに入っていた。

まあお金もないことだし、あと何日か出てひと月分の生活費くらいは稼いで、そろそろキャバ方面へ移動しようかなあ、などとなんとなく話し合っていた。

そんなある日のコト・・・

「あつ、やべえ!」

僕は突然重要なコトを思い出した。

「どした?」

と、おでんゆい。

「ゆいの・・・あの、あなたではなくて長女の唯ね」

そうそう、おでんには僕の長女の名前を与えたのである。

しかしとりあえずそれは今カンケーない。

「うん、唯ちゃんどーしたん?」

「こないだ高校に入学したんだった。んでもってニヨーボに、あの程度まとまった金額をって言われてたんだった」

「生活費も養育費もともに渡してないんですよ」

「うん、ここ数年さっぱり」 「ダメなパパね」

「はい、ニンゲンとしても、オトコとしても、ダンナ、父親、すべてにおいてダメダメなんす」

別居してはや五年。今さらよりを戻す気もないが、籍はまだぬけてない。

しかし、それはともかくとして入学金や制服などかなりお金もかかるだろう。いくらなんでもまったく無視はイクない。

「わたしが持ってたらず貸してあげるんだけど、今まったくないからなあ」

「正直、キミからならエンリヨなく借りるのだが、お金ないの知ってるしねえ」

「どうするの?」

「まあ、なんとかしてみますわ」

「ふうーん、がんばってね」 「へい」

なんだかおかしいなあ、と感じたのはそれから三日ほど経った頃・

・・。

出勤簿を出さないどころか、在籍までも外してからは、せいぜい週一ペースの出勤だったのに、なんでだかまたまいんち来出した。

これも閉店後の二人の会話。

「なんか最近立て続けに来てますけど、次はいつ来るんすか」

「ん？あしたまた来るよ」

「は？あしたも？」

「なに、来ちゃダメ？」

「あ、いや、来てくれるのは歓迎なんだけどね、そんなに切羽詰まってるのかね」

「うん、そうだね」

「全盛期に比べて、稼ぎも減っちゃったしなあ
半分どころではなかった。」

「まあそれはしょうがないよ」

「なるべくいっぱい稼げたらいいな」

「そうだねえ。でも少しずつでいいよ」

「ま、とりあえずメシ食いにいきますかね」 「うん」

この前年の秋から年末にかけて、このヒト、全盛期の頃はほとんどまいんち出勤してました。

夕方からラストの1時くらいまで働いて、そのあとメシがてら一杯飲みに行き、3時くらいに寝て6時に起きる。それからいったん自分の部屋に帰って着替えとシャワー。のちにガッコ。それが終わってまたそのまま出勤。そんな生活を三ヶ月ほどひたすら繰り返した。

ガッコではたまに居眠りしてたらしいけど、そりゃそうだな。あなた売れっ子アイドル並みのスケジュールじゃないですか！？と、ありがたいがしかし、ヒジョーに心配もしてしまうまいんちであっ

た。

でも、そんなコトいいつつ、たまには歌でも歌うかね、などとほざきカラオケで勝手に延長を頼み、わたしを殺す気か！とぶちギレられたときもございました。

なんだかんだで一週間ほど続けて出勤してましたが、連勤の最終日、とりあえず今日で最後ね、とおでんゆいは、来てすぐにそう言った。

「そっか」

「今後は、来れたとしても月イチがせいぜいかなあ」

「うん、わかった」

「でも、あと一回か二回だよ、来るのはたぶん」

「うん、わかった」

実質、今日でほぼ卒業である。

ついにこのヒトも卒業か。

おもわず感傷的になりかけた途端、「うーっす」センプイふうかの登場。

「あ、センプーイ、おはようございまーす！」

おでんとセンプイ、二人ともニヤニヤしながらイチヤイチヤし始める。なんだかなあ。

ひとしきりじゃれあったあと、あきてしまったセンプイふうかが、僕のほうに寄って来て、僕にセクハラ攻撃を仕掛ける。オトコにセクハラするヒト、初めて見ましたわ。

わたくしの粗末なモノをスラックスの上からさすり、またニヤニヤ。

たまらず僕は、最初にセクハラを受けてからここまで十数回の間

に少しずつためていた想いを、センパイふうかにぶちまけてみた。

「どうしても言っておきたいコトがあるんだが、言ってみてもいいかね」

「ん、なに？いいよー」

「僕には僕のルールというモノがありましてね・・・」

「ふーん、それで？」

「たとえばそうさなあ、人殺しというのは絶対にやらないとは言えない。そうするしかないシチュエーションに遭遇するかもしれないからね」

「ふーん、それで？」

「だがしかし、レイプだけは絶対にしないのだよ。それはワシのポリシーに反するからのお」

「ふーん、それで？」

こいつはおんなじコトしか言っていない。

「だけどなあ、アンタにだけはするかもしれん。そして、そうしたからといってワシが訴えられたとしたら、ワシはヒジョーに納得がいかん。裁判官にとことんそれがいかに仕方がないコトなのかを説明して、『コンコン（判決の前になんか叩く音）無罪である！』・そう言われてトーゼンなのだあ！！」

するとセンパイふうかは、より一層ニヤニヤしながら、

「エヘヘ」

ヒジョーに嬉しそうである。・・・そのへんがよくわかんないんだよなあ。

ふと横を見ると、これまた出勤してきたばかりのみみ氏が、「ミヤーミヤー、ボーナス、ボーナス」と言いながらお絵かきをしている。

感傷的な気分など遙かなたに飛んでいってしまい、ヤケクソになつたわたくしは、以上の様子をクールにグヘグヘ笑いで眺めている。

たインテリティーチャーもここに、「パイプを舐め回してるところを撮影させてくれませんか」と、珍しく風俗店の店長らしい発言をした。

意外と悪ノリがお好きなティーチャーもこは、「いいつすよ」そう即答してくれたが、わたくしの写真の腕前と、それから、入店翌月以降一年もの間、不動の本指名率NO1嬢の座にしながら、なにげにお笑い系のティーチャーもこの被写体では、グツとくるようなメルマガ用の写真など撮れるわけはなく、ブログのネタ系写真がせいぜいであつた。

ちなみに、今までの登場人物の中で、りつくとカピバラそら以外はみんなお笑い担当である。

夜中の12時を過ぎ閉店の時間。遅番のヒトたちがどんどん帰って行く。

おでんゆいは出勤するときはだいたいがラストまでで、その場合確実に店泊になるので、他に店泊のヒトがないときは、自動的にそのうち二人つきりになる。

閉めの作業を終え、書いたばかりのブログを読み返しながら、

「んじゃまあ、居酒屋『S』でプチ送別会でもしますかね」

それがなくてもどうせ『S』には行くんだけどね」

「そりゃそーだ」

いつしよに居酒屋『S』に行つたヒトは何十人もいるけど、最多はこのおでんゆいだろう。そんなカピバラそら。

「もう、ブログのチェックが終わるから、そろそろ出発の準備しなさいよ」パソコンの画面を見ながらそう言つと、おでんゆいが、「はい」と言いながらこつちに手を差し出した。

なんだろうと思い、おでんゆいの手に目を向けると、その手に十枚ほどの一万円札が・・・。

「はっ!？」

その行動は完全に意表をつかれた。1mmも予想してなかった。

「少ないけど足しにして」

「あなたはそのため、ここ最近すつとぼけながらまいんち出勤してたのかね」

「そーだよ」

「まったく気付かんかったわ」

「気付かれないようにしてたんだもん」

しかし、今の厳しい状況の中で必死こいて稼いだお金である。しかもたくさん貯金の一部というのならともかく、それがほとんど全財産なのだ。

「ヒジョーにありがたいし、僕は今、感無量ですが、さすがにこれは受け取れねっす」

と速やかに辞退しようとしたが、おでんゆいはそこで素直に引き下がるヒトではない。表向きはヘラヘラ・ニヤニヤしてるけども、イジョーに頑固モンなんである。

「ダメ!受け取って」

「・・・では、五万円だけありがたくお借りいたします」

「しょうがないなあ」

このコトは、生涯忘れまへん。

そして、おでんゆいは、ひと月後に一回だけ出勤して卒業していったわけですが、この物語にはまだまだいっぱい登場する人である。

ここまで何人かの人びとが登場しているが、一番ヒサンな役柄はばやであろう。本人からも、（最初の話がゲップって・・・）のガックリメールをいただいた。

それから、カピバラそらからも（そのときはまだカピバラそらの話題は出てなかった）電話で、「わたし、店長の前でゲップもおならもしたコトないですからね！」と、潔白（！？）を主張され、さらには遠回しに、ヘンなコト書くなよ、ナロー！とバリアを張られてしもうた。

なので、カピバラそらの回はおもいきり持ち上げたわけであるが（ウソだけど）、そろそろばやのコトも、名誉挽回の一打をかつ飛ばしてやらねばなあ。このヒトも、『J』の現役時代にはカンドー的エピソードがあるからなあ。アホなエピソードはその十倍あるけどさ。

とりあえず、またいったん『現在』へ突入する。ついこないだ、半年以上ぶりにばやと会ったのだ。

そして、意外にも、ばやと酒をのみに行くのは、出逢って二年以上経ちますが、お初のコトであった。

H駅の駅前交番あたりで待ち合わせをして、僕が先に待っていると、間もなくばやが無邪気にニコニコ笑いながら駆け寄ってきた。ばやの一番いいところは、ヒジョーにピュアで天真爛漫なところ。ちなみに欠点は、やや天然でややニブいところである。でもまあ、長所と短所は背中合わせやからねえ。

近くの安めの居酒屋さんへ向かう。だって僕ら貧乏人どもだもん。ボケボケニコニコと、またはハナシの内容がシリアスなときには

マジメに語り合いながらのんだくれ、焼酎のボトルが一本あく頃、正しくすみやかにカラオケへと向かった。

んでもって、最初にばやがサービスのつもりか、僕が小学生だった頃の曲を歌ったのである。

「こーゆーのは、どうやって覚えるのかね」 「お母さんが聴いてたから」 そういうパターン多いす。考えてみれば、このものがたりに出てくるヒトたちとはみんな二十歳も年が離れてるし、それぞれのお母さんとは世代がほとんどいつしよだからね。

中には、タメだったり、その子のお母さんのほうが若い場合もあるんだから、イヤになっちゃうわ。

「ばやのお母さんはいくつなのかね」

「49だな、確か」

「あーよかった、ワシより5、6個上で」

そしたらばや、やけにリアクションがでかいのである。

「えっ！マジっ！？」

「・・・なんでそんなにビックラこくのかね」

「だって・・・お母さんとおんなじくらいだと思ってた」

「というコトはなにかね、アンタ、ワシを50歳くらいだとずっと思ってたのかね」

「うん」

そりゃね、あたしゃ、20代後半から15年ほどで30歳くらい老けましたよ。26、7の頃の写真をたまたまおでんゆいに見せたならば、ジーっとせつなそうな目で僕の顔を眺め、「苦労したんだねえ」としみじみ言われましたよ。こないだだって、ティーチャーももこに、「ウチのまわりのそのくらいの年代のヒトたちの中では、おいちゃんが一番更けてる」なんて断言されましたわ。でもね、でもね。

「てめ、ふざけんな」

「ごめーん」

あやまられると余計傷つくわ！

「キミには最初からあんまイケないコト書いて申し訳ないと思ってたんで、次回こそはたくさんホメてあげようと考えてたんだが、へそ曲げたかんね。次もケナしてやるかんね」

逆恨みした僕はそのあと、白眼でばやを睨みつつ、サザンや嵐などを歌いまくり、気がついたらすっかり朝となっていたのである。

・・・今までさっぱりいいトコなしのばやである。

こうなったらとことんケナしまくってやろうかと、真夜中ひとりイツヒツヒと悪巧みしてたんだが、それじゃあわたくしがまるで、ケツの穴のちっちゃいイジワルせこせこねちっこニンゲンみたいなんで（ホントはそうなんだけど）、ばやのためというよりわたくし自身のため、わたくしのイメージアップのためイヤイヤばやをホめるのであります！

この物語のメインの（はずの！）一年前へ・・・。

いい加減でだらしなく、てんで頼りにならないダメダメ店長であった僕ですが、腐っても鯛なのである。キメるときはキメる・・・10打数1安打の確率で。

とある日、確か日曜日だったろうか、車イスに乗ったひととその世話人みたいなひとが店にやってきた。

たまに、「身障者でも利用できますか？」と、電話やメールでの

問い合わせはあるけど、直接の来店は珍しい。

このヒト大丈夫ですか？遊べますか？と質問してきた世話人さんに、メールなどでの問い合わせとおなじような返答をした。

「基本、自力でなんとかお風呂場に入るコトができれば可能なのですが・・・もちろんいくらサポートはしますが、女の子が抱き抱えて運ぶというのも難しいので・・・そのあたりは大丈夫でしょうか」

すると、世話人さんと車イスのヒトが顔を見合わせ、おたがいなんとなく困った表情になった。

（うーん、ムリなのか。困ったなあ）

僕もマジメな顔で考えこむと、世話人さんが、

「正直、ひとりでお風呂場に入るのはムリだと思います。なっ？」

車イスのヒトも力なく頷き同意する。ちなみに車イスのヒトは、頭脳というか、失礼ない方になってしまいが、知能は、世話人さんとの会話を聞いていると一般人レベルらしく知恵遅れといった感じではなく、身体は、事故で・・・とかじゃなくて、生まれつきのものだろう、手足がかなり短い。

「あとは程度の問題なのですが、まるつきり全部女の子の力で運ぶとかじゃなくて、肩を貸せばいくらかでも進むコトはできるでしょうか？」

すると、介護のヒトというよりはオトモダチっぽいヒトが、

「そのくらいなら大丈夫だよな、なっ？」

と、また車イスのヒトに聞いた。

「うん、肩を貸してくればなんとか少しは」

僕もその頃には、なんとかしてやりてえなあ！と強く思い始めていた。

しかし、お相手をするのは僕ではなく女の子たちの中の誰かなのだ。

そこで僕は、「もう少しだけお待ちいただいてよろしいですか」・
・そう声をかけ、待機室へ向かった。

そのときに待機していた4、5人のヒトたちに手短に事情を説明

し、もしそのヒトに指名されたら、またはフリーの場合、お仕事を
ふっても大丈夫かと問うた。

予想に反し、ほとんどみんな即答でOKした。ひとりだけ、どう
しようかなといった感じでいくぶん戸惑いを見せていたが、結局了
承してくれた。

みんないいやつなんだなあ、とカンドーしつつ、今度はいつも僕
がパソコンをいじくって作業をしている第二の待機場所へと急いだ。
そこにはぱやがいたのだ。

受付所のすぐ裏なので、会話は筒抜けである。

「事情はもうわかってると思うが、あなたは平気かね？」

そう聞きながらも、僕はすでに確信していた。こいつはアホでチ
キンであるが、ヒジョーに慈悲深く心優しきヒトなのだ、断るはず
がない、と。 案の定、

「いいよっ！」

威勢のいい返事である。さすがはぱや江戸っ子である（よくわか
んないけど）。

「おまえ、やっぱいいヤツだなあ」

「まあね。あ、あとお風呂場に行くのがタイヘンならシャワーも
なしでいいから」

そこまでかつ！そこまで優しいヤツであったか！

思わずジーンときてしまい目頭が熱くなった僕は、拳を固く握り
しめばやに訴えた。

「おまえは天然でそそっかしく、気分屋のチキン野郎で、わしと
近いレベルのアンポンタンであるが、とてつもなくいいヤツだ！」

「・・・ホメ言葉より、ケナしてるほうが全然多いけど」

「ばかつ、チョー大絶賛だぜ」

「ホントに？」

「ああ、ホントだともさ」
その後、無事ばやに白羽の矢がさりました。めでたし、めでたし。

さりげなく何気ないヒトコト、もしくは行動で、なんでだかいつまでも心に印象深く残ってるモノがあります。

たとえば・・・（すべて去年のおハナシ）。

今でこそ、ぶよぶよ汚れたオヤジになってしまったワタクシですが、こんな僕でも、かつては前途有望なる美青年の頃があったのだ！・・・あ、いや、これは言い過ぎでございますが、少なくとも今よりは数倍マトモであった。

ムカシの栄光は語ってはいかん。そーゆーのイクない！と思いつつも、現状にひとり逆ギレし、「オレだってなあ、イケてる時代があったんだい！」などと数人のヒトたちにアピールしたコトがあった。

そんなときは、特に肯定も否定もせず、だけでもほんのわずかに割五分ていどのお愛想苦笑いといったパターンが、まあフツのリアクションである。

んでもって、おでんゆいとかセンパイふうかクラスになると・・・
「ふんっ」鼻で笑う、小馬鹿にしゃがる、くそっ。

だけでも、だったひとりだけ素直に同意してくれたヒトがいたんである。

それは誰かというと、前回の主役ばや。

「たもたも（ワシのコトね）はムカシ、モテてたと思うよ」

「オマエは、まったくもってうすらトンカチであるが・・・いいヤツだ！」

前回の、車イスのヒトの件で15年、そのヒトコトで35年、計50年、こやつとお仲間でいようと思った。

それから、なにげに感心したのがみみ氏の行動。

居酒屋さんやゴハン屋さんなんかでよくありがちなんだけど、テーブル席で手前が木の椅子、奥がソファー、ってパターンよくあるじゃないですか。

僕も、イキがつて、オンナはすべてにおいてオトコをたてるべし！なんで勘違いしてた若造の頃以外は、当たり前のように女性を奥のソファーに座らせるし、女の子もフツーに座ります。

だけでも、「J」にいたヒトで、何十人もいっしょに飲みとかゴハンしましたけど、たったひとりみみ氏だけは、奥に座るのをかたくなに拒み手前の椅子に座っていた。

気まぐれで謎なみみ氏は、大和撫子でもあるようだ。
素直に感心いたしました。

そして、これも去年の「J」での日常的なヒトコマの中であつた。

僕はいつも通りパソコンの前で作業をしていた。

そのときは、ある女の子の撮ったばっかのプリクラを、とりこんだりボカシをかけたりしていた。

隣には、ティーチャーもここが座っておった。

ティーチャーが入店して、3、4カ月経ったくらいかなあ。アタマがよくて勘も鋭いティーチャーには、すでにもうワタクシの阿布さ加減やダメダメな部分のほとんどを見抜かれていたはずだ。

ボカシをかけながら、「せっかくよく撮れてるんだから、あんまボカシかけたくないんすよねえ、もったいないから。でも、勝手に薄くし過ぎてもいかんしなあ。女の子のリスクが高くなるしさ」

「そーですねえ、リスクも考えないとイケませんねえ」

それでも僕はウジウジと、女の子がヤバくならないよう、なるべくバレないように、だけでも可能な限り薄くという、矛盾に悩まされつつもなんとか境界線を探そうとしていた。

「ううっ、このくらいがギリギリのラインですかね」

「そーですねえ、そのくらいがベストですかねえ」

ニヤニヤしつつもマジメに答えてくれた。

「あとは、修整・加工って手もあるんですけどね」

「やっちゃんいますか？」

「いや・・・よりキレイにより可愛くなるとか、ある意味バレにく

くなるとかね、指名が入りやすくなるっていうメリットもあるかもしれないがね・・・」

「ふんふん」

「それはあんまイクないと思いますね」

「そーなんだあ」

「そりゃ、年齢とかスリーサイズなんかは、多少サバよんだり盛ったりはしてまずけどね、あからさまな騙しはイカンのじゃないのかなあ。しかも、指名が増えてもそれ以上にプレッシャーも増えると思うしね」

そしたらティーチャーがボソッと呟いたのである。

「店長って、まっとうなんですねぇ」

このヒトコトは、僕にとってこの上ない誉めコトバでありました。いいヒト！なんてまったくもって上っ面だけの、しかも実はまったくホメてなんかいないしゃらくさいセリフとは雲泥の差である。

さすが違いのわかるオンナであった。

すっかり爽やかな気分になった僕は、すみやかに自動販売機に向かい、スカツと爽やかコカ・コーラを買って、ティーチャーにお礼の意味をこめ、うやうやしく贈呈した。

・・・ 次回、美少女まりあんぬ初登場であります。

これは前にもいったと思いますが、この小説はすでにもう、一年前のできごとをベースにして、たまにもつと前を、またはときどき現在を語る・・・のか、現在がメインで、気が向いたら1、2年前に突入するのか、書いてる本人もまったくわけわからなくなっちゃいました。

というよりも、それ以前に、これが小説なのかブログなんだかはたまた日記、エッセイ、そこんところも見失ってるしだいでございます。

なので、ここいらで一発、ビシッと軌道修正を・・・するかと見せかけて、特になにもしない。これからもダラダラと書き続けていくのである。

それでいいのである。

と、充分に言い訳したんで（実はしてないけど）、ついこないだのハナシから。

半年以上ぶり、久々にまりあんぬに会いました。

15分だけ。

だけでも、そんなわずかな時間でしたが、まりあんぬの元気そうな笑顔が見れたんで満足であった。

なんとってこのヒトは、わたくしの中の（Jにいた子たちで）、

最も娘に近いヒトNO1なのだ。

根拠・理由は・・・よくわかんない。

ちなみに、実の娘の名前をつけたおでんゆいは、まったく娘っぽくない。

あのヒトは、仲間もしくは同志である。

んでもって、前回のこの文章を読んで、（50年仲間でいよーねー）と、ぱやからメールが来た。

この無邪気さがばやの強みであります。

・アンポンタンだけど。

おつといかんいかん、ハナシを今回の主役まりあんぬに戻さなくては。

まりあんぬに会いに行く途中の電車の中で、僕はある件でどうしても辛抱たまらんくなり、前から言いたくて言いたくでしょうがなかったコトを、メールにてかとうーんにお伝えした。これはかとうーんでなければおハナシにならない。

（以前から言おうと思ってたコトがあります！本日おもいきっていってしまいます！！）

（・・・なんででしょうか？）

（んとその・・・AKBの柏木由紀はSちゃんにそっくりだ！）

（どうしてもいいたいコトってそれですか？）

（うん、そだよ）

現状の数少ない男トモダチであり、大のAKBファンのかとうーんになら、きつとわかってくれるに違いない。

いや、もしかしたら、やっと気づいたんすか、遅くないっすかとケーベツされるだろうか。こりやいかん、しまったでござる。

・返ってきたかとうーんの答え。

（いやあ、似てないっす）

・なんだと？

（はっ？そっくりなんだけど）

そしたら、敵もさるもの、具体的にどこが違うのかを簡潔に述べていった。わたくしは、ぐうの音も出なくなってしまうましたが、Sちゃんのほうが可愛いですとの意見のおかげで、なぜか簡単にあきらめがつき、素直に敗者になってあげた。

ん？あげたっていい方が恩着せがましい？

だってホントは似てるんだもん。

まあそれはともかくとして、続いてかとうーんからこんなメールもきた。

（それよりも、板野友美とまりあんぬがそっくりですよー）

・・なにおう！？

（似てないよー）

さて、この勝負、今度はわしとかとうーん、どっちに軍配があがるでしょうか。

続きは次回ね。

ここ最近のパターンとしては、毎週火曜日らへんにこいつを更新してたんだが、あんま慣れない仕事のまいんちにくたびれ果ててなかなか書けなかった。

そして書けない理由はもうひとつ。

まりあんぬのパート2の前に書いときたいコトがありまして、けども極力触れたくないコトで、イヤ、でも避けて通るわけにはイカン！・・・うーっ、自分でもなんだかイライラしてきたぞ。書けなくなら書けや！

・・・というわけで書くコトにいたします。

それはナニかというと、掲示板モンダイですね。
くーだらないっすホント。

あ、そーだ。このヘタレ小説のクライマックスは、まさに掲示板モンダイについてモノ申すんだった。

どのみち書かなきゃいけないんすね。

機械とか最新兵器だとか流行りモンとかにまったくうといワシは、掲示板なるモノの存在すらよく知らなかった。

その存在を知ったのは5、6年前、風俗業界に入ってからでした。
それを読むのも仕事のうちと言われ読み始めたんですが、まあこれ

がカルチャーショックでしたな。

匿名をいいコトに言いたい（書きたい）放題であります。

そんなコト書いてて、生きてくのがイヤになっちまわないかなと逆に心配しますよ。

だってさ、僕なんか、もう20年以上も前から生きてるのがめんどくさくて、でもなんで生きてんのかってえと、自殺はイクない！ってなんでだか頑なに思ってるのと、こんなわたくしでも死んでしまったら哀しむヒトが数人いるだろうってのと、こんな世の中に少しでも期待してるってのと、それから、俺はダメニンゲンだが腐ってねーぞ！まだイケるぞ！という自負からあるからでございす。

なので、キミたちそれでいいのかね、と正直げんなりしてしまいますな。

自分を腐らせるコトをヨロコんでやってんだもん。

・・・んー、やっぱこの話題は長くなっちゃいますな。

今回は近日中にまりあんぬのパート2、んでもってそのあとにまたモノ申します。

さて、まりあんぬバナシの続きである。

すみやかにまりあんぬが『J』に入った二年ほど前へと突入しようと思うのだが、こないだまりあんぬに会ったときの様子をまずサクッとお伝えしてからにする。

その日僕は、K市の居酒屋でのんでした。連れとふたりで。

どうせK市に来たんだから、是非ともまりあんぬが働いてるお店に行こう！と僕は思った。

今年の1月から、行く行くって言うときながら、行けずにはや半年経ってたからね。

連れに言ってみる。「このあと、どうしても行きたいところがあるんだが、30分だけ付き合って・・・」

「やだ！」

断られると思ってはいたが、きちんと説明を聞く前に、ワシが話してる最中にきっぱり断言するのはヤメロ。

ま、そのあとにちゃんと事情を話しても、答えは変わらんかったけどね。

あー、いいよ、いいよ、ひとりで行ってくらあ！と、30分間別行動をとるコトにした。

まりあんぬの働いてるお店に入ると、（予告してたんで）まりあんぬがすぐに元気な笑顔で向かい入れてくれた。

その瞬間、僕は、半年以上ぶりに会った懐かしさよりもある感慨にふけてしまったのだ。

おっ、しっかりとそしてイキイキと働いてるではないか！・・・とね。

そして、そのときの僕の心境をさらに分析すると、感心とかヨロコビがほとんどで、あとはちょびつと寂しい気分も。

なんたって、まりあんぬがその飲み屋さんで働き出したのは、

僕もまりあんぬもまだ『』にいた頃で、正直僕は、すぐに辞めるんだろなと思っていたのだ。

なんでかというと、まず、人見知りのまりあんぬには、おしゃべりがメインの接客^{キヤバではないが}

は厳しいのではないだろうか、というのがひとつ。

それからもうひとつは、このヒトはワシが面倒みてないとお仕事が続かないヒトなんではないかと思っていたから。

・おろっ？サクつとがなんだか長引きそうになってもうた。

まあいいや。べつにパート5になろうがパート10までいこうがワシの勝手やねん、ワシは新潟生まれやねん。

「ひいき！ひいき！」って叩かれるコトもないしのう（繰り返すが、ワシは新潟生まれなんらて）

というわけで、このおハナシは、掲示板モンダイのおハナシと交互にしばらく続くであろう。

しかも、これまたしばらく、わたくしはこの小説をハイペースで量産する！

考えてみたら、コミックなんかは20巻、30巻なんかはざらで100巻を超えるモノも珍しくない。

だけでも、小説に至っては、わりと長編でも一冊の本が分厚くなるていどで、かなり長くても上下巻、それを上回ったとしてもせいぜい5巻がいいところではないか（例 白い巨塔、模倣犯など）。

なのでわたくしは、このおハナシで、小説でありながら20巻を超えるコトを目指す！

・・・もし本になったらね。

五年くらい前に（これも仕事と言われ）、掲示板というモノを初めて見て、それからまいんちのようにチェックしてましたが、そのときも今もメインの話題はいっしょっすね。誰が本番やらせてくれる、といった内容。

それから、誰々のここがいい！悪い！（外見も内面的なモノも）とかね。

いい！よりも圧倒的に悪い！が多いのは、ワルグチ大好きニンゲンがこの世にかなりいるといった寂しい事実の他に、見た目もサービスもいい子を見つけた↓気に入ったからしばらく指名しよう↓掲示板でもその子の素晴らしさを書き込んでいっぱい稼げるように人氣が上がるように協力したい気持ちもある↓だがしかし人氣が出てしまうと予約が取りづらくなってなかなかその子と遊べなくなってしまうかもしれない↓やっぱ掲示板でホメるのやーめた・なんつー心理が発生してる可能性も高い（これがいわゆるお気に隠しというやつか）。

僕だって100パーセント掲示板を否定してるわけではないのだ。たとえば、しょぼくれたオッサン（べつに若者でもよい）が、給料日に、よし！今日は風俗で遊ぶぞ！これで（ホテル代込みで）2万数千円使ってしまうのはヒジョーに痛い。だが今日はなんとしてもたまりにたまった欲求をなんとかしたいのだ。若いおネエちゃんとかあんなコトやこんなコトもしてみたいのだ。なあに、今月は、タバコも缶コーヒーマシ代もおもいきりケチっていけばいいのさ、タバコはエコーに変えて（今わしがそうである。ただ単に貧しくて

ケチっているだけであるが、一ヶ月以上経つとすっかり慣れてしまい、エコーが一番ウまいと感じるようになった・・これがわたくしのたくましさでもあり情けないところでもある）、飲み物は冷水機の水、夕飯はサッポロ一番塩ラーメンで過ごせばいいのさ。

そして、2万数千円を握りしめ、キンチョーしながらお店で受付して、その後期待とコーフンで胸・鼻の穴、それからズボンも目一杯膨らませながらホテルでおネエちゃんを待つ。

しかし、現れたおネエちゃんは、外見はなかなかだったものの、ヒジョーにナマイキな性格で、サービスもまったくやる気なしの手抜きもいいところ。

オレのこのやるせなさや、怒り・失望はどこへぶつければいいのだ！お店に文句を言いに行く勇氣はないけども、でも納得いかん！オレの缶コーヒーとまいんちの楽しみの吉牛大盛つゆたく（玉子・味噌汁付き）を返せ！

ついでに、この日のための一週間の禁欲生活も返せ！（もったいないからなんとか又イたけど）

・・これだったらね、へい、どんどん書いてくださいな、少しでもウツプンを晴らしてくださいな・・そうなりますがな。

だけでも、こんな風な正しい心の叫びなんて、全体の2パーセントくらいしかないんだわ。

それでもまだ3、4年前まではそれなりに平和で、ワシの感覚でいえば、ホントとウソが半分半分だった。

いつからだろう、お客さんの愚痴や情報交換よりも、女の子や同業者を含む、妬みだとかヒトを蹴落としてヨロコぶ悪趣味がメインになってしまったのは。

それにまんまとつられて底意地のイクないお客さんも、人数が増

えたり個人個人もレベルアップしていった（それでもごく一部であろうが）。

僕が『J』に戻り、そして店長になって一年ほど経った頃（今から二年半くらい前かな）、よっしゃ、オレもいっしょに叩かれたるわい！と思った。

もうすでに、「掲示板なんて気にすんなよ、無視がイチバン」なんてコトバは通用しなくなってきたからだ。

僕は、自分の存在も女の子同様全面に押し出し目立とうとした。

おかげさまで、ワシもずいぶんな叩かれようでありましたが、まあたぶん、裏方に徹してたとしても結果は似たようなモンでしただって欠点が多いし、なんたって無防備なんすから。

それでも、そのおかげでもっとよく見えるようになりました。

少なくとも、ここ2年以内は、2割のホントと8割のウソで掲示板はできている。

賢いヒトは、第三者的立場でもそんなん百も承知だろうけどね、バカみたいに踊らされるニンゲンもけっこういるってのが現実なんですな。

・・・おっ！？だいぶ長くなっちゃったなあ。とりあえずこのへんでいったんシメるか。・・・このシリーズはパートいくつまで続くんかいな。

まあいいや。今回は、まりあんぬ・・・パート3ですからねっ！

こないだ、2、30分くらいだけまりあんぬに会ったときに、本人に質問してみた。

あ、その前に、確認をした・・・板野友美とまりあんぬは似てるのかってコトを自分の心の中で・・・。

僕が出した結論。

やっぱり似てない。

パーツ的には多少共通点があるかもしれないが、雰囲気がまったく違う。

ともちんちゃんは、可愛いルックスに加え、ポケーっと天然なところと小生意気そうな小悪魔的な雰囲気のバランスやさじ加減が絶妙なんである。あのタイプはオトコ殺しでありオヤジ殺しなんである。一方、美少女まりあんぬも、顔立ちの整ったオトコ受けするタイプのヒトであるが、特に天然でも小生意気でもない。

フッフ、かとうーんの目は節穴なんであるよ、と僕は勝利者の気分には浸りつつまりあんぬに問うてみた。

「あんぬや、アナタは、板野友美に似てるって言われたコトがあるかね？」

それに対するまりあんぬの答えの予想。

その1

「えー！？言われなーい」

その2（百歩譲って・・・）

「たまに言われるかな。でも今までひとりかふたりだけだよ」

実際のまりあんぬの答え。

「（あっさりと）うん、よく言われるー」

「・・・・・・・・」

かとうーんよ、疑って申し訳なかった。
ワタクシの目が節穴でございました。

・・・まあしかしあれですな、『モノ申す』シリーズも果てしなく
続きそうな勢いですが、まりあんぬシリーズだって、きっと次回も
そんなだって二年前のエピソードになんてたどり着けやしない。

もうこうなったら、みみ氏シリーズやティーチャーシリーズ、セ
ンパイふうかシリーズにおでんゆいシリーズでしょ。

sonでもって、ぱやシリーズ、カピバラそらシリーズ、まだまだ
他にも、りっくんシリーズ、これはシリーズなど。

それぞれでローテーションを組んでパート100ずつ書いてやる
う、ヒヒヒ。

・・というわけで、今回は『モノ申す』シリーズの番なんだけど、
なんだかモノ申してんのもアキてきたんで、いきなりなんの脈絡も
なく、みみ氏バナシとなる。

秘め事！なんで、発表しづらいところでもあるのだが、おもいき
って書いてしまう。

そして、おもむろに1年数ヶ月前に戻ります・・。

ある日僕は、みみ氏から相談を受けた。

「もうガマンできない！」

僕は困惑しながら、

「ガマンしたほうがいいと思うよ」

そう答えた。

「ヤダ！」

「あんま良くないって、そういうの」

でも、僕の願いは聞き入れてもらえなかった。

そして、それから二ヶ月後、そこからみみ氏との秘め事が始まっ

たのである。

みみ氏が出勤するときにはだいたいいつもなんで、最低でも週に3、4回。

夕方、みみ氏が店に来ると、何分も経たないうちに目で合図を飛ばしてくる。

僕は緊張で手を震わせながら、密室へと向かう。

そこに二人で入り、すぐに鍵を閉める。

（今日こそは上手にしてあげられるのだろうか）・・・僕のそんな不安などおかまいなしに、みみ氏は服を肩のあたりまでめくり上げ、それからブラのホックも外す。

「今日はちゃんとやってね」「う、うん、がんばる」

こんなさえないオッサンが、みみ氏を満足させる事なんかできるわけないじゃないか！なんて思うんだが、そんな言葉は口に出せない。

いつまでためらっていても仕方ない。僕は勇気を出して、みみ氏の肩や背中に触れる。

「ねえ、まだあ？」

そんなにせかしたら、上手くいくものも行かないではないか。

「もう少し待ってて・・・あつ、ヤベっ」

「えー、またあ？　いったいいつになればもっと上手くやってくれるの？」

肩や背中、腰など露にしたまま、後ろ向きのみみ氏は僕

に冷たい言葉を投げかける。

・・僕の辛抱ももう限界だ。コーフンもMAXまできてしまった。僕は、みみ氏の背中に置いた手に力をこめ・・・

「やいっ！まいんちまいんちべんじょの中で、このイタズラ描きを隠すバンソーコー貼りやらせやがって！だからオレは反対したんだ！少しくらいシワになったからって、つべこべゆーな！！」

「・・・ミャーミャー・・・」

このヒミツの儀式、100回くらいやったかなあ。

・・さて、こないだ、これからはこの小説をガンガン更新していくぜ！なんて宣言したような気がするんだが、ガンガンどころか以前よりもペースが落ちてしまった。

最低でも週一は更新するつもりだったのに十日あいちまってるもんなあ。

まずは、それについての言い訳。

今僕は肉体労働者なのである。まいんち朝早く起きて、とりあえず派遣会社に行き、それから現場に向かう。

帰り、くたくたになって家に到着するのは9時くらい。

それからシャワーあびて洗濯して、軽く晩酌してから寢床でちょっぴり読書して眠っちまう。

ずっとこれの繰り返し。

それでも数週間前までは、電車でひとり現場に向かうつてパターンが多かったんで、その時間を利用してシコシコ書いてたんす。

だけれどもここ最近は車での移動ばつかなので・・・ま、移動の手段としてはそっちの方が圧倒的に楽チンなんだが・・・車中でピコピコ更新するわけにもいかず、やむを得ず滞ってしまったのである。

・・・と、すみやかに言い訳をしたところで、ハナシはこの小説の大筋とはまったくカンケーない方向へ進む。

三日ほど前、何気なくテレビの画面に目を向けると、なんかのCMで愛ちゃんが微笑んでいた。

（いい意味で！）素直で礼儀正しい優等生って感じですね。

このヒトが中学が高校生の頃、チョー久しぶりに見た（もちろんテレビで）ときは深くカンドーしたものだ。

あの、小生意気で負けず嫌いで泣き虫のクソガキが、よくぞ正しく成長してくれた！とね。

3才くらいのときの泣き虫愛ちゃんを見てたときは、将来どんなけワガママなオンナになるのやら、と他人事ながら心配してましたからね。

負けず嫌いの部分はきつとまだ残ってるんだろうけど、ナマイキさはまったくなくなりやした。

良かった、良かった。

だがちょっと待て！いくら幼少時代のコトとはいえ、ホントに愛

ちゃんは正しく成長したのか？三つ子の魂百までというではないか！
あの、好感をもてる態度・雰囲気は、決してうわつつらだけの建前上のモノとは思えないんだが、僕は少し疑問を感じるのである。

・・と、ここで時間がなくなっちゃったんで、続きはまた次回。
愛ちゃんを出したからには、15年ほど前のもうひとりのクソガキチャンピオン、落合（監督）のセガレ、フクシも出さないわけにはいかんしさ。

しかし、これ、完全にブログですな。

ま、いつか。

まずは前回の続きから。

天才卓球少女愛ちゃん、ヒステリックで癪の虫が騒ぎまくってたクソガキの頃の姿を見るたんび、この子はいったいどんな風に育つのだろうかと、心配で心配でしょうがなかったんですが、大きなお世話でございましたね。

ホントに正しく育ってくれました（ワシは親か！？）。

でもね、僕は密かに確信してるんす。

愛ちゃん、きつとプライベートでもタイヘンよいこだと思うんすが、たとえばそうさなあ、彼氏と（いるかいなかわかんないけど）大ゲンカなんてしちゃった場合は、クソチビだった頃の片鱗を見せてくれるんじゃないか。

ま、なんにしても僕がその姿を見るコトはありえないんすけどね（当たり前）。

さて、愛ちゃんの今の正しい姿にマンゾクしつつも、だけでもオトナになった愛ちゃんがギャーギャー泣きわめいてるとこも見てみたいなあ、などと無い物ねだりをする一方で、もう二度とあんな態度は許さんぞ！と憤りを感じたのは、落合（現・中日）カントクのセガレ、フクシ。

こやつも、5才くらいの頃のクソガキっぷりは凄かった。

たぶん、これ読んでるヒトたちのほとんどがフクシのコト知らんだろうから少し解説しますが、落合選手（当時）の担当記者をドレイ扱いして、オマエ呼ばわりで馬乗りになったり、その暴君ぶりはネロよりひどかったで！（ネロのコトはよくわからんけど）

でも、そんなフクシも、今ではすっかり暴君ぶりも影を潜めマトモになったようである。何年か前、中日がリーグ優勝したとき、落合カントクとチューしてましたな。

ま、それはともかく、フクシは学生時分イジメにあつてたようで、イジメなんてイクないね、くーだらないね、なんてつくおく思ってるあたいが、（たぶん）あとにも先にも一度だけ、いい薬になったじやろつと肯定した稀な一例である。

・と、こないだ見た愛ちゃんのCMからここまで長々と引つ張ったのであるが、これを通してナニをお伝えしたかったかとゆーと・人生、なるよーになるさ、ってコトかな・たぶん。

今回も、この小説とはまったくカンケーないブログ的なモノを書いてしまいましたが、今週はあと二回は更新いたします。マジメに小説書きまーす。

そういえば、ちょっとした手違いというか、はつきしいってワシの凡ミスで、三回前に書いたモノを消去してしもった。

いつも、前回までの分をコピーして、それに書き加えていくんだけど、そのときはすっかり前々回のをコピーしてしまったんですね。

バカだなあ、ホント。

消してしまった部分は、4年以上前に書いたワシの暗黒時代の物語をリニューアルして、さらにグレードアップまでもし（たつもりで）、この読者みんなに見てもらい、きっちり悲惨さをアピールしといて、ヒトビトの同情を誘い、特に情に厚く（熱く？）比較的単細胞でアンポンタンなばやに深くカンドー、かつ可哀想がっつもらって、ばやの音頭で『たもつを救う会』なんぞを設立してもらってですね、その会費でばる儲けしようと、まあ、そんな企みを書いたんですわ。

記憶に新しいヒトもいくらかいると思いますが、いちお改めて説明してみた。

これも、以前書いたか、消去したモノに含まれてるか、どっちかだと思うんだけど、改めて解説・・・。

僕が『J』に入ったのがおよそ6年近く前。

4カ月ほど働いたのち、いきなりK市の『O』というお店に移動となりました。【エンドレス】なんつータイトルの暗黒時代バナシは、そのお店にいた1年2カ月の間に書いたモノでして、当時『O』にいたヒトの中で三人位は読んでくれたかなあ。

その三人のうちのひとり、Nさんとの思い出を少し語ってみる。

ちなみに、名前を出すかイニシャルにするかの判断基準は、これも前にお伝えしたかと思いますが、まず10人ほどの主な登場人物は名前を出す（あだ名のヒトも含む）。それ以外は基本イニシャル。ただ、この業界を引退してから何年も経っていて、ここで当時の源氏名を出したところでモンダイになるコトなんてありえない、と僕が判断した場合は、名前を出すときもあると思います。

『O』にいた頃の、まるでオトコ同士のダチみたいだったあおいのように。

とりあえず、【エンドレス】を読んだあとのNさんの感想・・・
「とてもよかったです」

お世辞が89%含まれてると思うが、ヒジョーに嬉しかったでございます。

一方、あおいの感想・・・

「一番最後のさ、自分への誓い？なにあれ、箇条書きしてたけど。うぜー。」

トモダチ辞めてやろうかと思いましたわ。

では、約5年前へ・・・

・・・の前に、肝心なコト忘れてた。

Nさんの源氏名も、今ここで書いたところで本人へのリスクはまったく考えられないんですが、一部内容に源氏名を出すには抵抗がある部分があるので、あえてイニシャルで記します。

未経験で風俗業界に入り『J』で4カ月、そして新店の『O』に移動して数ヶ月経った。

最初は、とりあえずのその場しのぎ的なつもりでこの業界に入っただが、いろいろな業務内容を覚えたりスキルを身に付けたりしていくうちに風俗の仕事がおもしろくなってきた。そして、それと同時に、この仕事はかなり自分に向いているのではないかと感じはじめてもいた。

Nさんは、オープンして間もない頃に『O』に入ってきたのだが、ヒトとあまり絡みたくないという理由で、三つある個室の中の1号室にいつも待機してた。

僕らスタッフにも決して笑顔を見せず、無表情での、「おはようございます」「お疲れさまでした」・・・この挨拶以外は、ほとんど

口をきくこともなかった。

1号室での待機といったけど、入店以来、毎月リピート率は1、2を争うくらいの人気者で、待機の時間はあまりなかった。

系統としては美人と可愛いの間くらい、ただ、レベルとしてはまあまあクラスといったところか。

身長はやや高め、体型はややスリム、子持ちで、清楚かつ上品な雰囲気醸し出していた。近所にいる、けっこういい家に住んでてお金持ちの品のある若奥さん、またはお姉さんというイメージだったかな。

あまりの人氣に、その理由を、首をひねりながら店長と（僕はそのときはまだ平であった）よく推測しあってたんだけど、いつも最後は、お互い自信なさそうに、清楚な雰囲気・普通っぽさ、それから期待以上のサービス・なのではないだろうかといった結論になっていた。

そして、いつもツンツンしてるけど、お客さんの前ではよっぽど猫をかぶってるんだなんて意見も・・・。

そんなある日、僕がジュースを買いに店の近くの自動販売機まで出たとき、ちょうど、ホテルからお客さんと並んでいっしょに帰ってくるNさんの姿を見た。

女の子にもお客さんにも悪いと思い、すぐに背を向けて店に戻ろうとしたのだが、ふいに気になることがあって、つい僕は振り返ってしまった。

そして数秒間、僕はあるものに釘付けとなった。

運良く、Nさんとお客さんはお互いを見ながらおしゃべりをしてたので、僕の視線には気付かれずに済んだようだ。

僕は急いで店の受付所に戻った。

間もなくNちゃんも、お客さんと別れ二階の待機室へと向かおうとした。

僕は慌てて店を出てNちゃんを追いかけた。

「Nちゃん！」 階段を上がるうとしてたNさんは、足を止め怪訝そうに振り向いた。

「なんですか」

相変わらずの無表情だ、僕らに対しては。

「あのね、お仕事から戻ってきたときは、戻りました、とかひとこと声かけてもらえるかな」

「はい、わかりました」

氷のように冷たい無表情。

「もう部屋に戻っていいですか？」

「あ、うん、いいですよ」

ホントはもつと言いたいことがあったんだけど、言えなかった。

それから数日後、仕事から戻ってきたNさんは、「戻りました」とそつげなく言って、すぐに待機室に向かった。階段を駆け足で上がって行く。過去に二回ほどこんな風に自分の待機室まで戻ったことがあったが、おそらくとても嫌な思いをしてきたようだ。

「たぶんまた、お客さんに禁止行為かなにかされたんだと思うんですけど、どうします？店長行きますか。それとも俺が行ったほうがいい。」

店長に指示を促すと、

「俺Nちゃん苦手だから、行ってきたよ、よろしく」

店長、変わりもんとか問題児を嫌がるからなあ。

僕は特にそういうの苦手じゃないけど。

階段を上がり、僕もNちゃんの部屋へ向かう。ドアの前に立って軽くノックするが応答なし。いつものパターンだ。

「Nちゃん入りますよ」ひと声かけて中に入る。

Nちゃんはソファーに顔を埋めきつと泣いている。

しばらく僕は、そばに座り込んで、彼女の気持ちが落ち着くのを待つ。これも毎度おんなじ。

10分ほど経ってようやくNちゃんが顔を上げる。

「もう大丈夫です、すみません」

・・・ん？ここはいつもと違う。(Nちゃんにとつての)普通だったら、もう平気だからほっとしてくれ、なんてことを冷たく言うのに、なんだか申し訳なさそうにしている。心境の変化か、それともトラブルの内容がいつもと違ってたのか。

「あのですね、例えば、本番強要がひどかったとか、デートの誘いがしつこ過ぎるとか、その他もろもろなことも含めて、どうしても我慢できないときは遠慮しないで言ってもらえますか？」

「そういうの、覚悟してますから」

「あの、んと、そりゃ覚悟も必要だと思いますが、程度とか限度つてもものがあるんで、泣いてしまうくらいに強烈なときは言ってくださいよ」

「・・・はあ。でも申し訳なくて」

と、心底すまなそうな表情になってる。

僕は、そんなNちゃんを見ながらあることを確信し、意を決して自分の考えをぶちまけてみた。

「あのですね、前からNちゃんに言おう言おうと思ってて、けども言いづらくて、特に今なんかはお仕事で大変嫌な思いをしてきて、そんな直後に言うのもどうかと思いますけど、どうやら気持ちもだいぶ落ち着いたようだし、この際だから言ってしまうてもいいでしょうか」

うん、我ながら回りくどいっす。

一瞬不安そうな顔になり、それから何事かを考えてる様子であったが、わりと早く、「はい、いいですよ」となんとなく明るい口調で返事が返ってきた。

「えと、あの、Nちゃんはですね、もちろんお仕事はきっちりやってると思いますが、スタッフとか他の女の子たちを非常に毛嫌いしてて、Nちゃんの性格自体もとっても冷たく無愛想で、はつきり言ってる嫌なヒトだと、そういう風に見てたんですが、ここ最近、それは違うんではなからうかと感じはじめてるんです」

「それはなぜですか」

「なんでかという・・・」

・・・次回に続く。

久しぶりにマジメぶって書いてたら、なんだか肩が凝ってきたんでちよいと一息。

おととい、初めて茅ヶ崎に行きました。

まあ、行つたつつか、正確には仕事でトラックで通過しただけ。

それでもね、感慨に耽つてしまいましたよ。予想通り、特になんてコトのないところであつたが、ここが桑田さんの生まれ育つた場所か！とね。

サザンのデビュー当時、小学5年生のときからのファンっすから。

できれば今度は、ぜひプライベートで、江ノ島行つて、エボシ岩見て、それからなんといつても、鎌倉をゆっくり歩きたいもんです。

おとといの現場は、茅ヶ崎の先の小田原で、海のすぐそばであつた。

重たい材料をうんこらしよって運びながら、久々に海を眺めてたっす。

あたいなんか海のそば（日本海だけど）で生まれ育つたんすが、ここ25年で2、3回しか海を見てないなあ。

そういえば、今度リニューアルして書くつもりの小説には、海の思い出もきっちり入ってますわ。

二日間身動きもできないほどスタボロに痛めつけられた暗黒時代の一部が。

そんなね、甘い思い出、辛い思い出、海を見ながらいろんなシーンが浮かんできて、再び感慨に耽ってたら・・・

・犬のフン、踏んでた。

ダジャレじゃないやい。

今回は、ホントは、Nさんのコトの続き・・・最終章を書くつもりだったのである。

だけでもそれは次回にして、相変わらずのアホブログ的なモノを書くコトにする。

先週末、ふとワシは愕然といたしました。自分自身の感情に対して。

それは仕事上のコトなんだけど、もしかしたらプライベートな部分も関係してるのかなあ。

まあ、グジグジいうのはその辺にしろいて、本題に入りやす。

ガテン系の派遣会社に入ってもうすぐ半年になる。

予想通り、体力・腕力はそれなりについてきましたが、やっぱり苦手なモノは苦手。向いてないですな、この業種アタシには。

早起きしてカラダ目一杯使って、ヒジョーにニンゲンらしい生活ができるのにね。

ま、それでも、ダメはダメなりに必死こいてやってるけどね。

仕事中、または仕事が終わったあと、やっぱオレってダメだなあとオチたりもしますが、キホン精神的にはストレスのたまらないお仕事であります。

ニンゲン関係のグチャグチャもないし、カラダはきついけど、鍛えながら、トレーニングしながらお金ももらえるって考えたら、やつすい給料でもしゃーない、モノは考えようっす。

だけでも、近頃異変が・・・。

ま、カンタンにいつてしまえば、てめーらふざけんな！とブチ切れそうになったコトが最近二度三度重なり・・・といった事態なんすくわしくはまた次回。

あ、今回はNさんの最終章であつた。

だから次の次ね。

さて、もとのうすらトンカチアタマがさらに悪化し、それに加えて、過去に書いたモノを確認のためチェックなんてコトもほとんどしてないんで、誤脱字はもちろんのコト、ハナシが微妙にちやんとつながってないだとか、おんなじ内容を繰り返してるなんつーのもところどころあるかと思うが、ただいまサグレ中のあたいはかまわず突き進むのだ。

で、えと、なんだっけ・・・うん、Nさんの最終章ですね（そのくらいは覚えておる）。

では続きを・・・。

僕がNさんに、アナタは実はイヤなヒトなんかではないんじゃないでしょうか、と尋ねたところ、どうしてそう思うのかと逆に聞き返された。

なので僕はこないだから感じてたコトを素直に述べた。

「数日前、缶コーヒーを買いに外に出たとき、ちょうどお客さんとホテルから戻ってくるNちゃんを見たんです」

「はい。それがなにか。」

「そのときに見た、Nちゃんの笑顔というか微笑みは、冷たいニゲンのモノではありませんでした」

そうなのだ、僕が釘付けになってしまったのは、このヒトの笑顔だったのだ。

あんなにもあたたかく、そしてやわらかい笑顔を僕は初めて見た。それから以前にも増して、俄然Nちゃんに興味を持つコトになった。

だけでも、興味の対象の核になるモノは、おそらく、恋心というより、感動・憧れ・尊敬といったところだろうか。

「・・・わざとなんです」

「へっ？」

鋭く核心をついた割には間抜けな返事なこと。

「仲良くなってしまうと、お別れするときつらいじゃないですか。だからわざと素っ気ない態度をとってたんです。ごめんなさい」

やはりそうであったか。

「いや、べつにあやまるコトではないですが・・・そっか、そうい

うコトでしたか」

「それに・・・」

「・・・それに」

「せっかくホントのコト言えて、精神的にホツとしてるんですけど、でも私、もうすぐ辞めるコトになってしまします」

「そっかあ」

これはシヨックであった。

初期の『O』を支えたまさに大黒柱が抜けるのも痛いし、せっかくホソネで話せるようになりそんな気配だったのに、そこらへんもヒジョーに寂しい。

「あの、えと、僕は今小説を書いているのですが、よかつたら読んでももらえませんか」

なにも今日、明日辞めるわけではない。猶予は一ヶ月ほどあるのに、僕は、あせり、うろたえ、いきなりそんな発言をした。

「はい、ぜひ」

天使というよりも、菩薩様のような微笑みで、Nさんはそう言ってくれた。

・・・しまった。Nさんシリーズ、まだ終わんないや。Nさんに対して、ワシが痛恨の大エラーをしたコトを書かねばならんだ。なので、このシリーズはもう一回続くのである。

とりあえず次回は、うすらトンカチのブチ切れブログだい。

ワタクシの欠点の一つに、怒りが持続しない、という項目があります。

一見、そっちの方がよいではないか！ネチネチと執念深くいつまでも根に持つよりはイイ！！と思われがちですが、実はワタクシもそう思うのですが、ところがどっこいどんとい。

短所と長所は表裏一体なんであります。

怒りをすぐに忘れてしまう、なんてヤツ（僕のコトだけど）は、重大な決意なんてのも、うっかりしてるとすぐにどっかに飛んで行きそうになるかね。逆にいうとあれか、幼少の頃から私は将来のビジョンをしっかりと持ち、以来一切脇目もふらずひたすら一直線に進進しております！なんてヒトからは、恨まれたらヒジョーに厄介なのかなあ。それは困るなあ。

ま、そのヘンはいいとこどりすりゃいいんすけどね。

だけでも、世の中には、悪いとこどり・やらなくちゃいけんコトはあんまやらず、ヒトに対する嫉妬心や執着心とかはやたらつおい、なんてのが多いからなあ。

で、ハナシは少し横道にそれてしまおうが、ワシは、特に『J』にいた頃は、おもしろくないコトがあれば直接文句言ってきたさいねと、ときにはさりげなく、ときにはストレートにアピールをしてきたつもりでございました。

なんでかという、そこらへんで散々イヤな思いをしてきたからである。

直接言ってもらえれば、説明したり、そっかそれはワシがいくなかった、すまん、とか言えるのに、どこか知らないところで話されちまうと、ハナシがどんどんでかくなっていったり、真実からそれちゃったりしますからね。

そして、その前にまず、文句があれば正々堂々と真つ正面からぶつかるってのは、ヒトとして大事なコトだと思うんだけど。

だがしかし、ワシはそれを100%否定してるわけではない（おろっ？ 掲示板モニダイのときと似たような展開だ）。

なんでなら、ワタクシ自身が、知らないところで言いたい放題言われイヤな思いをしただけではなく、かつて、あるヒトに対して正直なキモチや意見、プラス、批判までしたところ、すっかり根に持たれ、陰険な仕返しをされた経験があるからである。主に仕事からみのコトでは、上司やお客さん、または同僚などに文句や批判とかいちいち浴びせてたらタイヘンなコトになっちまうかね。

なんだかハナシがややこしくなっちまったが、結局ワシはナニが言いたいのかというと、まず一つは程度のモニダイですね。あんまり陰でガチャガチャ文句垂れるんなら直接言えや！ってコトです。

もうすっかり怒りが覚めてしまったけど、あたいがこないだイラストしてたのはそこです。

んでもってもう一個は、これも程度というものが若干カンケーするんだけど、世の中ホンネとタテマエを使い分けるっちゃうーのは確かに必要なコトかもしれないが、さらには、ホンネで正々堂々ぶつかれば、ワシのように、腐れ野郎にネチネチ嫌がらせをされちまうなんてコトもあるが、だがしかし、オレだったらそんなコト絶対ないのになー、と、そこいらをイマイチ理解されてなかったのが、残念無念であつた・・・そういいたかつたのである。

今回はもう終了のお時間でございますが、次の次の回あたりに、今の仕事場のおハナシをしたいと思います。

それから最後に、ワタクシの怒りやストレスがおさまったのは、何事も持続しない性格のせいであるというの他に、ぱやに對し、「このバカちゃんが。オマエはワシと同レベルのおたんこなすじゃ」

と悪態をつき、さらにはセンパイふうかに、「鬼っ！悪魔！」と罵り、それでスッキリしたというコトも大きな要因であるところに付け加えとく。

また、センパイふうかは、ワシの攻撃を受けたあと、「せめて『小』を付けてよ、『小悪魔』」などとしやあしやあと寝言をぬかしていたが（二年前、おでんもおんなじセリフ言ってたな）、すみやかに寝たふりをし却下した。

Nさんが間もなく辞めてしまうと聞いた頃、スタッフの仕事上のコトでなんだか腑に落ちない一件があった。それはなにかというと、上層部（特定の個人ばかりを攻撃するのは本意ではないので、あえてこのような表現をしとく。だけども最低限必要なコトは書かせていただく）から、どうせ辞めてしまいうニンゲンに仕事なんかまわす必要はない、ましてやフリーをまわすなんてのはもつてのほかだ！・なんつー指令を出されたのである。

なんだそりゃ！？と思いましたね。

確かに言ってるコトには一理ある。去ってしまうヒトよりもこの先まだ残りそうなヒトを優先しろというのはわからなくはない。

ワシだって、つけ回しの権限が与えられたとして、そんなときフリーが一本入りました、待機時間やその他もろもろ（フリー一本誰につけるかを検討するのに、ヒジョーにアタマを悩ませるのである）のコトを考えれば、第一候補はNさんなんだけど、第二候補のヒトはそのあとお仕事につけなければその日にでも辞めちゃうかもしれない・・このような状況であつたならば、ワシだってきつとNさんに

泣いてもらう。

だがしかし、これから先がある子なるべく優先にというんではなくて、すべてをそのようになるん？ 指令に対して、当時はまだヒラだったワシも反論いたしました。

この業界、バックれるヒトが多い中、きちんと事前に告知してくれたNさんに、その仕打ちはひどいのではないだろうか。ましてや、開店からここまでダントツの貢献度のヒトなのに。ホントなら餞別としてポーンと10万出してもいいくらいだと思いますとね。

それに対し上層部のヒトは、なんだかなだめるようなコトバを發しつつも、根本的に意見は変わらんかった。

この仕事に慣れてきて、しかも、これはもしかしたら自分の転職というものではないだろうか・・なんて思い始めた頃なんで、世間の厳しさというより、業界の嫌らしさみたいなモンを見せられたように、なんだかユーウツな気分になっちまいました。

・おっといかん、ハナシがズレてってしまう。

20才ぐらいのときに一回、原稿用紙に換算して50枚ほどの小説を書いたコトがあるんだが、あまりのレベルの低さにガツカリし、それ以降書こうとしてもまったく書けんくなってしまった僕の、およそ20年ぶりに書いた小説をコピーして、Nさんに手渡した。

そんな風にして見せたのは、他に、あおいともう一人くらいだったかな。

んでもって、こないだ書いたけど、Nさんからヒジョーにあたたくうれしい感想をいただいたのである。

実際は、お世辞度90%だったのかもしれないけど、ワシは勝手に真実度100%と解釈して喜んでいた。

ま、あおいにはダメ出ししていましたけどね。ドンマイ、ドンマイ。

そして、僕の痛恨の大エラーはNさんが辞めて間もない頃。

その頃は、僕はまだヒラだったし、店も案外厳しいんで、個人的に連絡先を交換してたのは、あおいと他二名（詳細は略します）くらいだったかなあ。

Nさんとは、連絡の交換や、いつしよに外にゴハン食べに行くとか、一切ありませんでした。

だから、今までどうもお疲れさまでした、ありがとうございます。た・・・というメールもお店のケータイで送った。

こちらこそありがとうございます、次の小説を楽しみにしています・・・という返信をもらって、またあたいは浮かれていましたね。

だから、僕の中では、何カ月か先にまた新作が完成したら、そのとき一本Nさんに連絡入れよう、そして、できればまたあたたか感想をいただこう！・・・そんなつもりでいたんです。

ところがあるヒトに厄介な相談を持ちかけられてしまったのだ。

あるヒトとは、『O』の常連さんであり、Nさんの大ファンであり、また、店の目の前の僕がまいんち通ってる雀荘のスタッフさんだ。

Nさんは、特に年配の方に人気があって、そのヒトも50才過ぎであつた。

いつものように朝方まで麻雀をし、店を出たところで、そのIさんに「長谷川さん！」と声をかけられた。

誰もいないところで話しかけてくるというのは、あんまヒトには聞かせたくないハナシ、つまりNさんのコトであろうとすぐに予想

できたが、まさにその通りで、内容を要約するとこんな感じであった。

自分はNさんとプライベートでも仲良くしていて、実は温泉旅行もしたコトがある。店を辞めるのはなんとなく聞いてはいたけど、急に連絡が取れなくなって困惑してる。なんとか長谷川さんの方から自分に連絡するように伝えてもらえないだろうか。・・・こんな内容のハナシをかなり必死になりながら僕に訴えてきた。

こっちの方が困惑するわ！と思いつつ・・・だってそこまでしてるとは思わなかったから。

だけでも、ある意味、そのエピソードがNさんの心の深さを物語っているのではないだろうか。なんか複雑な気分でしたけど。

とにかく僕は、気持ちわかるような気がするけど、もうこの業界を引退してるんで、できればそっとしておきたい、といった返答をした。

だけでもIさんは、「旅行だってNちゃんは一銭も受け取ってないんだよ！それに彼女は、いろいろすごく良くしてくれてさ！オレだって今まで散々遊んできたから、営業っての？そんなのこっちだって百も承知だけどさ、Nちゃんに限っては絶対違うよ！だから今の状態はどうしても納得できないんだよ！ねえ頼むからさ、伝えてくれよ！」

ますます困惑した僕は、それでも、一応伝えはするけど結果は期待しないでください・・・そう答えた。

そして次の日、店ケータイからNさんにメールを送った。

（こんにちは。その後、元気でやっていますか？）

とてもじゃないけど、いきなり本題には入れない。
すぐに、

（おかげさまで元気でやってます。新しい小説は進んでいますか？
楽しみに待ってますね）

こんな優しい返信がきた。

僕はますます用件を切り出しづらくなり、今一所懸命進めています！
頑張ります！！・・・といった内容だけのメールを送りたかったんだけど、Iさんと約束した以上は守らなくてはいけない。

ヒジョーにユーウツな気分以下のようなメールを送った。

実はIさんが、どうしても連絡を取りたがっています。

温泉旅行のコトも聞きました。

それについては、禁止行為だからどうかという気は、まったくありません。

ただ、あまりにも強烈に訴えてくるので、伝えるだけ伝えてはみます、と約束したのです。

・・・それっきり返信が来なくなってしまった。

その日の夜、酒をのみながら一人反省会をしました。

やはり、あんな内容のメールはすべきではなかった。特に、旅行の件は持ち出すべきではなかったのだ。気付かないふりもまた思いやりというものである。

だが、いくら悔やんでも後の祭り。

Nさんは、僕の甘くてほろ苦い思い出の人になってしまいました。

さて、前回は柄にもなくマジメぶった文章を書いてしまったが、
気を取り直して元に戻るとする。

やっぱあれですな、仕事を楽しくする、または逆につまらなくな
っちまう、その分け目っちゅうのは、向き不向きとか、キツイ楽チ
ンだとかも、もちろん大きな要素ですが、一番はなんたってヒトで
すな。

いっしょに作業してるヒトたちが気持ちのいいヒトたちばかりな
ら肉体的にしんどくたって楽しくお仕事できるし、イヤなヤローと
いっしょなら楽な作業でもまっぴらごめんでありやす。

では、この半年の間に行った、いい現場・やな現場、それから、
いいヒト・やなヤロー、んでもって、ささやかな幸せを感じたとき・
ぶちギレそうになった瞬間などをいろいろ記してみる。

まずは、最悪な現場ワースト1。

これは、杉並区の公共施設の（建て替え）解体現場。

解体ってコトはぶっ壊すってコトだから（あたりまえか）、じゃ
んじやんコンクリートをはつって（崩して）ひたすら運ぶ。 ヒジ
ヨーに空気が悪いし、電気も通ってないし建物の外側はまだそつく
り残ってるんで真っ暗。 ところどころライトを置いてやっとわずか
に見えるくらい。

約二ヶ月ほど続いたその現場に、ワシは幸いいちんちしか行かさ
れなかったけども、なんだか数年前に観た映画『カイジ』みたいな
世界でしたね。

地下の洞窟ではなくていちお地上だったけど、現場の薄暗さや作

業内容なんかはかぶるモノがありました。

しかも、光が少ないってイミの暗いだけじゃなくて働いてるニンゲンたちも暗い雰囲気漂っているんす。

ワシはその日ネコ（ニャンニャンではない、一輪車だ！）係で、はつったガラをスコップでどしどしネコにぶちこまれて、いっぱいになったらただひたすらガラ置き場まで運び続けるといった単純作業。

現場仕事が苦手なワシにとっては、込み入った手先の器用さを必要とする作業よりも、こういった単純作業のほうが歓迎なんである。

いちお体力もそこそこついてきた頃だったんで、作業自体は特になんてコトなかったんす。

ただいかんせん、暗すぎて空気が悪すぎる（物質的にも雰囲氣的にも）。

んでもって、その現場が最悪中の最悪だと実感したのは10時の一服時。

タバコの吸える場所を聞いて行ってみたんす。

階段脇の廊下に椅子が十脚くらい置いてありました。

そこにはヒトが5人くらい座っていて、残りの椅子にはタバコやら飲み会の缶が置いてあった。

その時点では特に何も思わず、立ってタバコを吸ってたんだけど、そんときの椅子に座ってる5人の会話を聞いてイヤになりましたね。

「さつき知らないオッサンがその椅子に座ろうとしてたから、『座れねーよ』って言ってやったよ」・・・だと。

くだらねー！。

しかも、一服が終わるまでしっかりチェックしてましたけどね、残りの5席は最後までほとんど誰も座らなかったっす。

腐ったヤローはいっぱいいるっす。

加藤（by金八先生）は決して腐ったミカンではないのでミカン箱から放り出してはイクないけども、こーゆーヤツらはミカン箱からでも貯金箱からでも放り出すべきである。

その日はホントクーだらないいちんちでございました。

・・・このシリーズもなんだか長引きそうになってきたなあ。
まあ、一回おきくらいにチビチビ進めていくか。

さて、今回は、完全にブログ的内容から始まるのである。

最近テレビ観ててヒジョーに憤りを感じたコトが二点ほどあるんだ。
である。

ばかあ、それらについて、ぜひ魂の叫びというモノを訴えたい！

まずひとつめ。

メディアは芦田愛菜ちゃんと鈴木福くんを酷使し過ぎなのではないか。

『マルモのおきて』が終わってからこれまで、いやたぶんしばらく続くだろうが、出てる番組の数がイジヨーである。

相手は6、7才のコドモだぜ。

ガッコもあるし、ちっちゃい子はいっぱい眠らなあかんのに、使ってる側はいつたいナニを考えておるのか。

ま、銭もつけのコトばっかだろうけどね、あまりにも節度というモノが欠けてるんじゃないですかね。

この調子だと、ふたりとも年内に倒れてしまうで。

で、あともうひとつは、トシちゃんの件・・はい、田原俊彦っす。

こないだから始まったゴールデンタイムのバラエティー、爆笑問題が司会してる番組のレギュラーになりましたね。

ワシはヒジヨーにほっとした。

「オレはビッグだから」発言で干され、はや16年ですかね。長かったなあ。

はたで心配してたあたいでも（わたくしの心の師匠、ナンシー様もきつと天国で心配してたに違いな）こんなに長く感じたってコトは、当の本人のトシちゃんにしてみれば、気が遠くなるような長さの暗黒時代であつたであろう。

なんであそこまでつてくらいマスコミに叩かれてたもんなあ。

しかも、（想像ついてたけど）ビッグ発言の記者会見なんてさ、トシちゃんを悪者にしたてあげようと悪意たつぷりの編集作業してたかんね。

「オレくらいビッグに・・・」の前にね、自分は芸能人だからいくら取材されてもかまわないけど、ニヨーボ・コードモはそういうわけにはいかない、そして自分は家族を守らなくてはいけないのだ・・・この前フリが一番の肝なのに、その場面は16年後のこの前初めて放送されたんだぜ。

汚いったらありやしない。

・・・僕は、何かを批判するときには、とにかくまず真実を追い求め、それからフェアに！というコトも厳しく追及するし、もし言いがかりをつけてしまったときには土下座や切腹・・・まあ切腹はしないだろうけど・・・そのくらいの覚悟で挑んでるつもりです。

だって、言葉は人を殺せるから。

・・・うつ、なんだかマジメぶってしもうた。

ま、とにかく、遅すぎた復活のトシちゃんであるが、安心するのはまだ早い。

トシちゃんの相変わらずのノー天気ぶりが、なんだか悪い方に転がってるような気がするんす。なんか狩野とあんま変わんないように見えるんだわ。やっぱブランクが長いかなあ。

ここはひとつ太田の腕に期待しよう。

たけし並の再生工場っぷりで、なんとかトシちゃんを救っていたきたい。

先週末、今の職場・おなじ派遣会社に属してるヒトとちよいと風俗バナシをした。

そのヒト（Ｔさんとする）とワシは、本好き・元接客業など、いろいろ共通点があり、けっこうハナシも合うんでわりと仲良くしている。

んでもって、Ｔさん（３０才）とふたりで足場の応援に行ったときは、仕事が終わったあと現場近くのコンビニで軽く一杯やるのが恒例化しつつある。

ちなみに、実は今日（１４日の月曜日）で、三日連続Ｔさんといっしょの現場で、電車に乗ってる今この瞬間、隣にいたりするんだなあ。

・・・で、なんだっけ、ああそっか・・・おとといですね、ラッキーなコトに午前中で仕事が終わったんす。

ここんとこ急激に冷え込んでしまっただけで困っちゃうけど、おとといはポカポカ陽気でしたな。

世田谷のファミマの前で、真っ昼間っから、おでんを肴に発泡酒や完チューハイを、Ｔさんとふたりでかつくらっておりやした。

そんなときにＴさんが、つい最近風俗に行ったというハナシをしてきたんす。

なんでも、川崎の店舗型ヘルスで2万出して65分コースつちゅうのを頼んだみたいなんだけど、（オトコからの）攻めをいっさい拒絶され、挙げ句の果てには抜けずじまいだったんだと。

・と、ここまでは行きの電車の中で、そしてここからは帰りの電車ですべて書いてあります。

ええ、もちろんＴさんもいっしょです。

まあそれはよいとして、さっきの続きね。

風俗店でひどい目にあつたＴさんに、ワシもおもわず、それはイクない！そのコはとんでもない風俗嬢である！！と深く同情した。

んで、その流れで、Ｔさんから質問を受けたんだ。

風俗嬢とキャバ嬢の性質の違いってなんですか？とね。

ワシは、まず自分は圧倒的に風俗嬢の味方である。それと、いわゆるパブスナックや居酒屋ではオナナのコとお仕事をしたコはあるけどキャバでは働いたコがない。ましてや、お客としても自分からは間違つてもキャバに行くコはないんで、キャバ嬢に対しては情報不足かつ偏見も混じるであろう・・・そんな前フリをしてからでも断定的に返答した。

「かたんに言ってしまうと、キャバ嬢はうまくヒトを利用する。一方、風俗嬢は自分を犠牲にする・・・そこが大きな違いなのではないでしょうか」

もちろん、全部が全部そうじゃないですけどね。

立派なキャバ嬢もいればいい加減な風俗嬢もいるだろうし、政治家でも警察官でも弁護士、教師、お坊さんなどなど、どの職種がよくてどれが悪いではなくて、どんな職種でもいいヒトも悪いヒトもいますな。

けども、傾向というものも確かにあって、ワシは、風俗嬢とキャバ嬢に対してそんな印象をもっています。

ああとあれだな、政治家だっていいも悪いもあるっていったけど、98%はワルチームだな、きつと。

ま、それはとりあえずいいや。

ここに登場するヒトたちは、まだ現役のヒト、引退したヒト、それぞれいまして、それ自体は自分自身の都合で決めればいいと思うんだけど、引退したはずがまた出戻りってパターンもよくあります。

前も書いたかもしれないけど、そこらへんの事情にワシがさっきいった自己犠牲っちゅーモンをからめて、次回じっくり書かせていただこうと、そんなつもりでございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691t/>

風とともに・・・行こう！！

2011年11月17日21時30分発行